ふるさと風

第61号 (2011年6月)

風に吹かれて (40)

白井啓治

『したたかに強かに反抗して明かりのみえて』

このふるさと風も今月からいよいよ6年目に入る。5年を卒業したのである。小生3、5、7、9という区切りの段階を持っていて、最終段階の9、即ち九重の壁を確り越すことが出来れば何の活動でも組織でもその後は自然体継続できるようになる、と考えている。

但し、「確りと越す」が大前提である。そして「確りと」という事の中身、或いは考え方が非常に重要になってくるのであるが、その「確りと」とは、詩文に詠んだ『したたかなる反抗』である。

少し前であったが、したたかなる反抗に関して水上勉氏の「一休」より引用して紹介したことがあったが、その時の文の一部をもう一度紹介してみたいと思う。

『水上勉氏の「一休」を読み返し、一休宗純の十六歳頃に詠んだとされている詩を読み先人の偉大さを想った。その詩は、：

法を説き禪を説いて姓名を挙げ、

人を辱しむるの一句聴いて声を呑む。

問答もし起倒を識らずんば、

修羅の勝負、無明を長ぜん。

…である。この詩を読みながらこんなことを思った。したたかな反抗が大事である。したたかな反抗こそが己を救い、国を救い、ふる里に暮らしを創る、と。したたかに現在に反抗し批判することこそが明日に夢を持つ者の役目である。したたかに反抗し批判することによって明日への夢としての物語を紡ぐこととなり、次代に残すべきものが見えてくるのである。』

当ふるさと風の会は、「ふるさとの歴史文化の再発見と創造を考える」を掲げて自分の志文を書いていこうと集まった仲間たちの会である。歴史文化の再発見と創造を掲げている以上、既成を事実にしなない、既成を事実と考えない事が重要になってくる。既成を事実として受け入れて何も疑問を持たなくなってしまうところには、再発見はないし創造もなくなるからである。

先月号の鈴木健さんの投稿文に「新しき発見とは、そこにありながら光があたらないものに、光を当てることである」と書かれてあったが、まさに光があたらないところに光をあてるためには、既成を事実としなない反骨の精神がないと難しいといえる。既成を事実として見てしまうと、その事実からは新しいものは何も生まれなくなる。

既成の事実というのは、極論すれば新しい意見や発見を受け入れない、受け入れたくないという

事に他ならないのである。また既成を事実化しないという事は常に進歩を続けて行く為にも重要なことである。既成を事実化してしまうとその事柄はもうお終いという事である。お終いになったらもうそこからは何も生まれないう先に進むこともなくなるのである。

既成に対する強かな反抗は、表現の世界、芸術の世界では当たり前のことで、特に新人の発掘においてはその人に既成を打ち破る力があるかないかが大きく問われることになる。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会も6年目を迎えることになりました。ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考えている方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

型破りという言葉があるが、歌舞伎の世界から出た言葉で、日本の芸能は様式美と言われながら、そこには型破りがなければ名人にはなれないのである。新しい表現だとか、新しい発見においては、型破りと言える「既成を事実化しない強かなる反抗」が必要なのである。

石岡は、歴史の里としてのキャッチフレーズが与えられている。しかし、そのキャッチフレーズを持つには歴史認識とその中身がお粗末すぎる。だから歴史では飯が喰えん、などという言葉が出てくるのである。歴史の里として自慢し、それで人を呼べる遺産が沢山あるにもかかわらず、この市の歴史認識は国府に国分寺だけである。

国分寺などの瓦を焼いた跡の発掘が進みその窯跡についての自慢話を作ろうとしているのであるが、その方向が首をかしげたくなる方向である。窯が幾つ見つかった、というのは其れなりには意味のあることであるが、只国府や国分寺の瓦を焼いた窯では何の意味もない。何故あの地に、新しい焼き物技術を持った集団が住み着いたのか、また瓦会の地には縄文の土器が数多く出土するがその関連性はどうか、等々当時を検証・考察すべき大事なことがあるのだが、窯跡の発掘に纏わる報告記事には発展性の欠片もないと言ったら悪いが、歴史としての夢や物語がなさすぎる。

「ああそうですか…」
以上の言葉が出ない。これでは歴史の里の名が泣いてしまう。

歴史の事実というのは、そこから何を見るかという事への道標にすぎないのだから、その道標をたどっていく事を考えなければ人が呼べる歴史の里にはならないだろう。

歴史・文化の再発見と創造の為に、既成の事実に対して強かなる反抗の声をあげることが、矢張りふる里を自慢するためには必要であろう。

六年目の高望み

打田昇三

古狸とか化け猫とか、高齢化してくると動物は神通力で力を増すらしいが、普段から雑事に神経をすり減らしている人類は逆に忘れることが多くなってくる。忘れないまでも興味を示さないことが多くなるような気がする。「ふるさと」「風」も創刊以来、丸五年が過ぎて六年目に入る…」と主宰の白井啓治さんに言われながら、狸並みに歳を経てきた私には格別の思いは無かったが五月に刷った第六〇号を見て、難しい計算で六〇を十二か月で割ると確かに五になる。これでふるさと風の会が六年目に入ったことを実感したのである。

「古い歴史を誇る…」と市史の冒頭に書いてはあがるが、現実には「？」の石岡市で「ふるさと」の歴史・文化の再発見と創造を考える」という大それたスローガンを掲げているのが風の会である。

「かつて茨城県教育委員会と茨城文化団体連合が出した「茨城の文学史」には「明治前期の社会と文学」という項目に、維新の際の水戸藩を中心とした混乱により茨城県の「…教育の立ち遅れが、近代的な人間観の成立をさまたげ、茨城における新しい文学の出現を大きく制約していた」と書かれている。これを「ああ、そうですか…」で済ませて良いものであろうか？現実には、それだけで終わっている。風の会の活動には、そういう壁を

ぶち抜く気構えも含まれているので、郷土を誇りに思う皆さんには是非、参加をして頂きたい。

「言葉を文字にする」ことは古代から人間が人間であることを証明するために行われてきたが、書かれた言葉と話す言葉は別であった。明治期には日本語が大きく変わり、話す言葉が其の俚で文字に書かれるようになった。「言文一致」である。江戸期の名残を残す作品から西欧文明の紹介に始まり、言文一致に到達してから現在のように誰でもが自由に文章を書ける時代になったのである。偶々、ある会の催しに出席したことから紆余曲折の時代に活躍した文人たちの様子的一端を知ることが出来たので、是を紹介して風の会の活動が冗談では無いことの証明にしたいのだが：

二葉亭四迷（ふたばていしめい）と坪内逍遙（つぼうちしょうよう）の出会いを日本近代文学の出發と説いておられたのは、当時（昭和中期）の早稲田大学教授と言うより「島村抱月（しまむらほうげつ）」の研究で知られた川副国基（かわぞえくにもと）先生で、明治十九年一月二十五日に二人が出会った日を「文学の日」にすべきであろうと主張されていた。そう言えば近年はやたらと多い記念日に「文化の日」は有っても「文学の日」は無いと思う。それなのに「芥川賞」だの「直木賞」だのと、プロ作家の登竜門に過ぎない些細な出来事に新聞・テレビが大騒ぎをする。

一般に、我々が使っている現代の言葉は司馬遼太郎先生の「坂の上の雲」で知られた正岡子規が「俳句革新運動」を展開して広まったと言われており、NHKも特集番組を作った。そしてロシア文学に影響されて近代的な文体で小説を書く近現代文体の創始者、に挙げられているのが二葉亭四

迷であり、四迷に文学の道を啓示したのが早稲田文学の中心にいた坪内逍遙であるらしいのだが、今は余り知られていない。明治二十年に発表された四迷の「浮雲(うきぐも)」は、言文一致体を用いた近代写実小説の先駆とされた。

文学などには縁遠い「文が苦」の程度の物好きではあるが、私は終戦後の混乱が収まりかけた頃に就職らしい就職をして、いきなり勤務させられたのが、その組織のトップの使い走りをする仕事であった。当時は電話機も碌に無い時代であったから、お偉いさんが部下の幹部職員を呼ぶ際には私のような「人間電話」が必要だったので、普段はお茶汲み、掃除、決済書類の送達、昼飯の準備などをしていて、ベルが鳴ると給湯室から飛び出して御前に畏まり呼び出す部課長など相手の名前からスピードが命である。鼠小僧のような仕事を何の抵抗もなくこなしていたのだが、或る時に文学青年っぽい先輩から「お前が仕えているトップのお偉いさんは久保栄の実弟だぞ」と言われた。大岡越前守の弟でも別に驚く理由は無いのだが：久保栄は、明治時代に旧鉄道省の高官から札幌商工会議所会頭として財界で活躍した久保兵太郎の子である。一高、東大、そして築地小劇場文芸部で小山内薫に師事して西欧の戯曲を翻訳、やがて日本プロレタリア演劇同盟に加わり「新説国姓爺合戦」「五稜郭血書」などの作、演出から代表作「火山灰地」を書き、戦時中は新劇の弾圧で検査された。戦後はNHKで「博徒さむらい」の作・演出をした。その筋では知られた人なのであろうが私は「左翼文学の人」程度しか知らなかったから、御主人様が海軍将校出身で見るからに謹厳な

のに、兄弟でも大きく違うものだと感じたのを覚えていて。「文が苦にならずに書ける努力」を始めたのは、その影響かも知れない。

偉そうなことを書いて申し訳ないと思うがお許し頂くとして、近代文学研究の中で明治期に始まる近代文学史のスタートを、どう捉えるかは種々の論が或るようで、敬称は略させて頂くが文芸評論の立場からは中野重治、小田切秀夫らのグループが「二葉亭四迷」「北村透谷」「石川啄木」のラインを主流と考え、伊藤整が「谷崎潤一郎」を推し、川副先生は独自に「坪内逍遙」「森鷗外」「島村抱月」の流れで一つの近代文学史を考えておられた。

島村抱月という人は、一般には文学者としてよりも松井須磨子が歌って空前のヒットをした「カチューシャ」の作詞や西洋近代劇の紹介などで知られているけれども、本来は自然主義文学運動や文芸協会設立に貢献したり、早稲田の教壇に立ちたりした学者さんで、日本近代文学の主流を現代に継承した大きな功績があるらしい。

歴史というのは人と人との出会いから始まるように冒頭で述べたように、無名の文学青年・二葉亭四迷が、既に作家として輝いていた坪内逍遙を訪ねたことから日本近代文学は現代に通じる道筋が開かれた」と解釈して良いのである。二葉亭はともかく「四迷」とは妙な名前であるが、これは「文学で身を立てる」と言った四迷に対して呆れ返った父親が「くたばってしまえ！」と怒鳴ったところからペンネームにしたと言われる。水戸藩と同じく徳川御三家の尾張藩江戸詰め家臣の子に生まれた四迷は、軍人を志して陸軍士官学校を受験したが果たせず、東京外国語学校でロシア語を学ぶ。ところが学校が廃止されロシア語科

は商業学校に編入されることになり、怒った四迷は退学して文学で身を立てようとする。その為に出身が同じ尾張藩だという理由だけで、面識の無い坪内逍遙を訪ねたのである。

初対面の大先生を訪問するだけでも気が引けるのに、此の時の四迷は逍遙の作品を堂々と批評しづらい。踏ん返り返った作家先生だと、烈火の如く憤って追い返すのであろうが、坪内逍遙は違っていた。四迷の批評眼に敬服し、作家への道筋を開いてくれた。逍遙の指導で書かれたのが四迷の代表作「浮雲」であり、これが日本近代小説の出発点とされる作品である。

明治文壇の先駆者であり、代表的な作家でもある坪内逍遙はユニークな人物だったようで、尾張藩士と言っても領内・美濃加茂の代官所に勤務する役人の子に生まれ、母親が商家の出だったらしく武士の子にしては自由闊達に育てられた。明治十四年に東大の政治学科を出ているのだが、卒業論文で「ハムレット」が出題され「登場する王妃ガートルード(ハムレットの母、王の死後、王の弟・クローディアスと再婚)のキャラクターを批評せよ」という問題があった。王妃の性格分析を英文で書くべきところ、真面目な坪内君は登場人物を「善人」と「悪人」とに分けて勤務評定のような答案を堂々と提出したのである。

見方を変えれば間違った答えでは無かったのだが、担任教授が英国人であったから「祖国の偉大な文豪・シェークスピアを侮辱した」と受け取り、酷い点数をつけたらしい。当時の東大は教授の質が良く無かったのか：この為に近代文学の祖も落第の憂き目を見た。このことは相当なショックだったようで、普通の人間なら落ち込むところ坪内

君は猛勉強をして是を克服したと伝えられる。そして明治十八年には「小説真髓」を著して文壇の注目を浴びることになる。

気の毒な坪内逍遙が二度目にショックを受けたのが、新進気鋭の文学青年「二葉亭四迷」の訪問を受けたときと言われる。逍遙は愕然としつつもこの青年に作家としてデビューすることを勧め、指導を惜しまなかったのである。明治二十年六月、日本初の言文一致体小説「浮雲・第一編」が世に出ることになった。

立ち直った坪内逍遙は、執筆活動に並行して明治二十三年に早稲田大学の講師となった。その翌年に「頭脳明晰、文学的感性豊かで世の中にこれ以上の秀才は無い」と言われた一人の青年が早稲田に入学してきた。それが島村抱月である。此の人は島根県の貧しい家に生まれたが幼少時代から才能を惜しまれて素封家の養子に迎えられた。将来は医者か文学者かと迷っている時期に同郷の医師であり軍人であり文学者でもある森鷗外に紹介されて、文学的啓示を受けたらしい。早稲田に入った抱月は坪内逍遙からも大きな影響をうける。

森鷗外は明治十七年から二十一年にかけてプロイセン（ドイツ）帝国に留学し、医学も学んだろうけれども「ハルトマンの美学」と呼ばれる観念論的な哲学を学んできて「慶応文学」を提唱する。哲学が生身の人間にどう作用するか知らないが、文学には精神的な影響を与えるようで、一方の早稲田には坪内逍遙が居り、大西祝（おおにしはじめ）という哲学の大家の影響を受けていたから必然的に早稲田・慶応の対立が起きる。

これが明治二十四年九月に読売新聞や雑誌を舞台にして起こった「没理想論争」と呼ばれる言論

（文藝）戦争である。片や早稲田の坪内逍遙軍と慶応の森鷗外軍とが日常生活には全く関係が無いことで八月に亘り戦った。幸いに戦死者は出ず、勝敗がどうなったかも不明である。その頃は日本も暇な人物が多かったのか：この対立で一番に困ったのは両軍の大将からお世話になっている島村抱月で、苦肉の策では無いが自分も明治三十五年から三年間の欧州留学で全く新しい「新美辞学」という自然主義思想を身につけてきた。以後、早稲田は自然主義の本山と言われたが、抱月は松井須磨子との恋愛から早稲田を去り、芸術座を組織して西洋の近代劇を日本に紹介した。必然的に逍遙とも訣別することになる。

ごく大雑把に、素人考えて整理すると日本の近代文学は坪内逍遙に始まり、その指導を受けた二葉亭四迷が言文一致の先駆けとして「浮雲」を出し、逍遙の流れは、森鷗外の影響を受けた島村抱月に依って現代に引き継がれた：ということであろうか。

二葉亭四迷は「浮雲」を発表したあと、ロシアの小説家ツルゲーネフの作品「あひびき」などを翻訳した。これが国木田独步、田山花袋、島崎藤村らに深い影響を与え、近代日本文学の確立に貢献したといわれている。そののち、四迷は政府機関に就職したのち、東京外国語学校教授、政府諜報機関、朝日新聞記者などを務めた。

これに対して坪内逍遙は早稲田大学教授として文学、演劇の改良革新に努め、受験で失敗したシエークスピアの研究、全巻翻訳を成就した。

堅苦しい文学のことなど、どうでも良いのだが、「ふるさと 風」の会も規模こそ違えど、文章を書くことを活動の主体にしている。昨今の飛ん

でる小説も、さることながら、千何百年もの間、使われてきた日本語が大きく変革したのが明治維新である。改めてその時代を顧みることも、或いは今後の発展に繋がるかも知れない―そのような思いからこの原稿を書いてみた。何分にも古狸と同じなので「化け損ない」があつたならば平にお許しを頂きたい。

石の上にも七年

兼平ちえい

お陰様で当会報『ふるさと風』は六年目に入りました。皆様のご愛読とご支援に感謝申し上げます。

当会報の代表、脚本家の白井啓治先生の教えである「画家であれ、俳優であれ作文力のない者は達成が難しい。今日の嬉しかった事、楽しかった事の幸せを拾って言葉におとしなさい」に心を動かされ、苦手な文章力に強くなりたくいと、ご指導のもと三年が過ぎ、そして五年が過ぎた。

残念ながら、先生の教えをなかなか実のらせる事ができず、相変わらず毎月の原稿に難儀しながら、悲鳴をあげながらの、締め切り過ぎての原稿提出を繰り返している。先生も諦めずに「上手、下手と言うよりも、兼平さんの一生懸命さが文章に表れているから」と早く編集したい気持ちを抑えながら、提出を待たせてくれている。

最近、愛読者の方から「兼平さん、以前の文章とは違ってきたよ」と励ましを頂いたり、ふるさと風の同期の打田昇三さんには「文章を書いて自分を表現するのは人間だけに与えられた特権だと

思う。文章に表現する特権を放棄して文作を嫌だ
という人は人間を放棄しているしか思えない」と
発破を掛けられている。

「継続は力なり」を信じて新たな気持ちで白井先
生の次の目標である、ふるさと風の会、七年目に
向けてのスタートである。

白井先生とは平成十三年の秋に石岡市歴史ボラ
ンティア養成講座の受講生としてお見かけしたの
が最初でした。勿論言葉も交わしませんでしたし、
先生は石岡人にしては、およそ場違いの雰囲気
を放っていた。その当時、私は「下手でいい、下手
がいい」のキャッチフレーズの絵てがみを楽しん
でいた。

「歴史の里いしおか」とうたっているわりには、
石岡市民の皆さんが石岡の歴史をご存じないこと
に疑問を持ち、絵てがみの展示会等には歴史に関
する作品を出品していた。そこで目をとめて頂い
た方の紹介で、再び白井先生にお会いする事が出
来た。

文化、歴史を語りつがなければ生活がなくなっ
てしまうと危機を力説する白井先生のもと、ふる
さと風の会員として、そして石岡市歴史ボランテ
ィアの会員として皆さんに石岡の歴史をお知らせ
している。

毎年四、五、六月は県内の六年生（毎年三十校
余りの小学校）の見学で案内に力が入ります。資
料館と復元家屋を中心に風土記の丘は賑わいます。
しかし石岡市内の小学生的の見学がほとんど見られ
ない事が残念に思われる。是非見学して、郷土へ
の誇りと郷土愛を育んで頂きたいと思う。旧石岡
市内では文化財を中心に主に大人の皆さん（年に
六十〜七十の団体来市）への案内に励んでいる。

これからも元気で皆さんのお役に立ちたいと思っ
ています。

「ふるさと風」七年目に向けて、今後とも皆様
のご愛読とご高評の程よろしくお願いいたします。

・みどり咲き誇る 里の風待月

・瓦礫の山に響くトランペット力強く

ちえこ

六年目へのスタート

菅原茂美

2006年6月「ふるさとルネサンスの会会報」として
スタートした本会報は、第11号から「ふるさと・風」
と名を変え、前月第60号を迎えた。全員が毎月一度
も欠けることなく、運営と続けたその情熱に敬意を
表す。「継続は力なり」とよく言われるが、先輩達
の努力のお陰で、新たな次の一歩が踏み出せる。

私は第19号から参加したが、過去の投稿を振り返
つてみると、よくもまあこれほどまでに、独善と偏
見を顧みず吠えまくったもの。現役時代、公務員と
して、言いたいことも言えず、脳味噌が腐るほど長
い年月、雌伏の時を過ごしたその反動か？ 古希を
過ぎ、何に臆することもなく、齒に衣着せず、高唱
を続けたい。今や青春満開。

今回の原発事故は、自然の脅威を「想定外」では
済まされない。想定外とは、当事者の知識が不足か、
又は自然を見くびったかのいずれかだ。今回は傲慢
な後者だ。聡明な次世代は、謙虚な反省からのみ生
まれる。今後、人類の奢り高ぶった物質文明偏重の
傾向に、歯止め的重要性を主張し続けて行きたい。

人間も、DNAという利己的な遺伝子に、生存の
根幹を支配され、弱肉強食の野生の本能から逃れら
れない。どんな高尚な理念を掲げてても所詮は、「己の
利」に貫かれ、生存競争を生き抜いて行く。長い人
類の歴史がそれを証明している。その最たるものが
○〇大王とか、△△皇帝である。己の欲望を満たす
為、強力な武力で周りを虐げ、王国を築きあげる。
権力の象徴として巨大な構築物を建造する。一般庶
民や兵卒は王のための消耗品となる。これが「知恵
あるもの」ホモ・サピエンス」の辿ってきた歴史だ。
産業革命以来、近代国家に民主主義が芽生え、市民
に自由や平等がもたらされたとはいえ、十分とは言
えない。歪な社会は厳然として存在する。今後人類
は何に重点を置き、明るい未来のために、今、何を
なすべきか：浅学ながら提言を続けていきたい。

啄木再会

鈴木健

今も親交をつづけている中学時代からの先輩か
ら、石川啄木の歌に越谷達之助が曲をつけた『初
恋』のCDが送られてきた。この曲は日本歌曲の
歌い手が好んでレパートリーに入れる曲であるが、
彼のことだからおそらくすべてを聞き比べなくては
気がすまなかつたのだと思う。あっちこつちの
CDからダビングしてくれた。これでもかこれで
もかと、女声、男声入れ替わり立ち代り、次から
次に歌い継がれている。男性が歌えば砂に腹ばっ
たのは男のことかと思えるし、女声で聞けば女性
のことかと思われる。私にはそのくらいの幼稚な
感性しかないが、そのくせ、聞いているうちに、

「思い出だしぬ」とかでなく「おもひ出づる日」としたのはなぜかという疑問が湧いてきた。

砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

原作のこれではあつけない。そこで歌曲の方では、

初恋のいたみを

遠く 遠く あーあああああー

あーあああああー

思いいづる日イー

と繰り返しをいれた。聞く人は、この「あーあああああ」の催眠効果で擬似体験の次元に誘いこまれる。思いつているのは自分で、それは今のことだ。最後の「おもひ出づる日」の「日」なんかは耳に入らない。

だが、啄木は「思ひ出づる日」としている。今のことではなく、今日はそういう日であった。それは今日という過去のことであった。今は距離と時間を置いて冷静にそれを思いだしているということなのだろうか。今となつては初恋など遠いむかしの夢、いのちなき砂のようなわが人生だれがいとしんでくれよう。それが啄木をして、「おもひ出づる日」と歌わせたのだろうか。それをアアアアアと詠嘆調にのせてしまうと、今思いつている気持ちになり、女学生好みの感傷歌に転じてしまう。それはそれでよい。しかし、啄木は最初の自選歌集に『一握の砂』という名をつけ、冒頭にいわゆる「砂山十首」を載せている。この『初

恋』とともにそこに載るつぎの歌などをあわせて詠むと、啄木の心はけつして甘いものではなく、真剣に命と向き合っていたように思われてくる。

いのちなき砂のかなしきよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ。

もしかしたら、「いのちなき砂」は啄木自身のことではなかったか。それにしても、傘寿を過ぎた先輩はどのような思いでこれらを聞き比べ、また、私に送ってくれたのだろうか。

つぎも、親友から送られてきた話。

何年前、思索的な歌詞を伴った重厚な音調の『昂—すばる—』(谷村新詩・曲)という格調の高い歌が広まった。

眼を閉じて何も見えず 哀しくて眼を開ければ

荒野に向かう道より 他に見えるものはなし

ああ 砕け散る宿命(さだめ)の星たちよ

せめて密(ひそ)やかに この身を照らせよ

我は行く 蒼白き頬のまま

我は行く さらば昂よ

呼吸をすれば胸の中 凧(こがらし)は鳴き続ける
されど我が胸は熱く 夢を追い続けるなり

ああ さんざめく 名も無き星たちよ

せめて鮮やかに その身を終われよ

我も行く 心の命ずるままに

我も行く さらば昂よ

ああ いつの日か誰かがこの道を
ああ いつの日か誰かがこの道を

我は行く さらば昂よ

曲も歌詞も新鮮かつ洗練されていて、しかも、親しさが感じられるものであった。ただし、歌全体の意味は各人が自分なりに解釈すればよいということにして、私はあとでみるようにそれを啄木哀歌と見ている。

歌詞の一、二番とも、一、二行目は一度自分も経験したことのあるような、あるいは、どこかで聴いたことがあるようなものだったが、思いつけないでいた。たまたま親友から小冊子が送られてきた。私が知りたいと思っている情報を犬の嗅覚で嗅ぎ取って適切な資料を送ってくれるのだが、今回も偶然ページを開いて眼に入ったのが、つぎの啄木の歌だった。

呼吸すれば、

胸の中にて鳴る音あり。

凧よりもさびしきその音！

※

眼閉づれど、

心にうかぶ何もなし。

さびしくも、また、眼をあけるかな。

順序は逆だが、これって似すぎている。谷村新司さんはこれにヒントを得たのか、あるいは、歌

人は同じような着想を持つこともあるから、偶然の一致かもしれない。が、そのことには興味はない。ともかくここで、ふたたび啄木の歌に出会えたのである。皆様はすでにご存知のことでしょうが、調べるとつぎのようなことがわかった。

啄木は、『一握の砂』以後の歌をまとめて『悲しき玩具』というタイトルの自筆ノートを残した。

歌は現実を変革する力のない「悲しい玩具」であることを論述しているから、そこからの命名であろう。一九三六年一月一〇日に書物展望社が復刻発行している。また、それとは別に一九一二年六月二〇日には東雲堂書店がその歌集を刊行している。右の二首は自筆ノート版にはなく、東雲堂版の方の筆頭に掲げられている。それは小紙片に書いてあったのを死後に発見して入れたもので、最後の歌といわれる貴重な作品であった。貧窮のどん底に置かれ、肺結核に冒されたが、一二年の元日には、まだ、「今も猶（なほ）やまひ癒えずと告げてやる 文さへ書かず 深きかなしみ」と友に書く体力があった。その後、肋膜炎も併発したらしい。荒涼とした木枯らしよりもずっとさびしい鳴り止まぬ胸のゼイゼイ。熱と疲労と衰弱で考えも浮ばない。でも、最後の力を振り絞って手元の紙切れに書き取ったのではなからうか。そのようなことを念頭に『昂（たか）すばる』の歌詞を読み直すと、意味がわかってきそうになる。そして、啄木は同人雑誌『スバル』創刊時の発行名義人でもあった。

シロウトの分際で、啄木にまで口出ししてしまった。が、今さら引つ込みはつかない。そこで、啄木というと必ず私の頭に浮ぶことを、この場を

お借りして述べさせていただきます。

それは金田一京助との関係である。

啄木は一八八六年の生まれ。本名は一（はじめ）

旧制盛岡中学時代に文学を志し、二級先輩の金田一京助らと交遊。一九〇六年長女誕生。京助にちなみ、京子と命名。一九〇八年金田一を頼り再度上京。以後、金田一の援助で貧窮・病苦とたたかいたながら創作を継続。一九一〇年八月二十九日、大日本帝国は、かの悪名高い『韓国併合』を行った（一〇〇年後の昨年、日本の総理はその誤りを認めて謝罪したが、その直前のこと、「東京毎日新聞」では、八月二十五日に言語学者の金田一京助が「言語学上の日韓同系」で、「人類学者は日本民族の始祖は韓地より来たれりといふ学説に一致す」としたうえで言語同系論を説き、「併合は復古である」と結論した。）

（小隈英二『単一民族神話の起源』という。「言語学上の日韓同系」を説いて、日本人の「始祖は韓地より来た」のだから日本がその「始祖」の韓国を併合するのは「復古である」と言うのは、誰にもわかる詭弁である。金田一はそのような詭弁を使ってまで時の権力に迎合し、やがて国家権力によって権威づけられることになる。それに対して啄木は、

地図のうへ 朝鮮国に くらぐると 墨をぬり
つゝ 秋風を聴く 同年一〇月

と、きっぱり対決し、列島の上を吹き抜ける秋風に、この国の末路を予見していたかのように、

時代閉塞の現状を 奈何（いか）にせむ 秋に入りて ことに斯（かく） 思ふかな（同）

大海の その片隅に つらなれる 島島の上に 秋の風吹く（同年二月）

と歌った。それでもなお、金田一は恩人である。同年一月一日に出版した処女歌集『一握の砂』の自序に「同国の友 文学士 花明 金田一京助君」ほか一名の「両君に捧ぐ」という献詞を掲げている。このころから身体不調を覚え、翌一年は金策と肋膜炎・肺結核・肋膜炎等との闘病とに明け暮れ、二年四月帰らぬ人となった。享年二六歳。来年は没後一〇〇年になる。

なお、一九〇三年七月の『明星』に、
ほほけては 藪かげめぐる 啄木鳥（きつつき）の
みにくきがごと 我は瘦せにき

という歌をのせたが、同年一月から、その「啄木」をペンネームとして使いはじめている。

大切なもの

伊東弓子

東北大震災には私も心や体が病んだ。

そんな時、若葉の中で素敵な人に合った。でも合対した私は、身窄しい老女だった。こんな事って一寸面白い物語になりそうと彼此暖めてみたが、纏まることはなかった。そんな中から拾い上げたものは、掛け替えないもの、ごく身近なもの、冬から春にかけて再確認した「家族」へのおもいだった。

主人は福祉の力を借りてお願いし、息子、娘、

妹家族に見送られて韓国へ向かったのは二月中半だった。

飛び立つと、機内にいる感覚ではなく私自身が雲に乗っているようで、今迄にない気持ちに興奮していた。林の木々は杉だろう、茶色で花粉を出す寸前の重い枝が動いていた。日本アルプスは濃紺の峰が連なり、残雪が木の枝のように山肌に見える。日本海に雲の影がうつっている。長い川が朝鮮半島を蛇行している。その川に太陽が影をおとし光る玉のようだ。その玉は川を転がっていく。私と一緒に北上していく。雲は地上を隠したり見せたり、覆ったりしている。孫悟空が釈迦の偉大さを知らず走る姿も想像してみる。川が海に流れた所で陽の玉は地上、山上を走り出した。「仁川」も近くなってきた。私は二時間でこの地につくことになるが、祖母のことを思った。百二十年も前に飛騨高山から雲田（北朝鮮側）に移り住み、終戦に戻ってきた。曾祖父母共に行って生活していたのだからそこが故郷だった。でも二度と行く事出来ない地となり淋しい気だった。

「お婆ちゃんには故郷がないんだよ」と聞かせてくれたことも何度かあった。三代が暮らした朝鮮、これから生きていく娘の家族のいる韓国、送り出してくれた日本の家族、深い思いを感じながら降りていった。

韓国も冬だった。畑、田、日本と同じく灰色系、茶色系の景色だった。冬野菜は見当たらない。黄砂が舞い冷たい空気が肌をさす。そんな中でも楽しかった。孫が小さいだけに遊びが中心、よく相手をした。家の手伝いも沢山出来て、来た甲斐があったと満足だった。帰りが近くなってきたある日、突然孫が、

「お婆あちゃん、日本へ帰るの。つまらないな。お婆あちゃんが帰らないように飛行機飛ばないと良いな」

と言ったのは四日前だった。そして次の日、姉さんやお母さんから電話が立て続けになった。

「大変だよ。テレビ見て、日本が大変だよ」

テレビのチャンネルを回すと、大津波が町を通じなでいく様子が映されていた。電話はすでにまもなく電話も通じたが、動きがとれないで不安のみが募っていった。その不安を除いてくれようとしてか、

「オモニ、このままこっちにいな」

「お母さん、食料すぐに送ろうか」

「放射能の被害もあるようだから、みんなをこっちへ呼びよせてはどうかね、ハルモニ」

と暖かな言葉を心を伝えてくれた。ここにも娘家族をとりまく大きな家族があることをあらためて嬉しく思った。

帰りはいつも辛い、涙を止めようとせず素直に流しながら又来ることを約束して別れた。飛行機よりも早い雲に乗せて欲しいという思いが湧いてくる。終戦後日本へと急いだ人達はどんな思いだったろう。かと胸いっぱい広がってくる。

悲惨な出来事があった日本も春が一杯だった。

たんぽぽ、水仙が道沿いに、ゆき柳、れんぎよが垣根に、菜の花が畑を彩り、こぶしや桃が庭を飾っていた。屋根の壊れがひどい事が青いシートにかけてある様子でわかった。ガソリン配給も解消したので、事が沢山走っている。道路が大分混雑している。

「ああ、私を待っていてくれる家族がいる」

それだけで疲れた体も力を出せた。息子達は娘の引越を手伝い、嫁さんが迎えに来てくれた。随分遅れたので待っている時間も長かったのに明るく迎えてくれた。夕食のことを心配して寄ってくれた。品物も並んでいた。今迄と違った大変な状況の中で息子夫婦ともより強い絆を持った。こういう機会を有難かった。

この二週間の遅れは息つくひまもない程の頑張りがだった。

「大変な時にいなくてよかったね」

といわれると辛くて苦笑いしていた。詳しい様子が分かってくると落着く自分を感じた。想像していた悲惨さよりも現実を知った悲惨さに対処する強さがあった。遅れながらも桜が咲いた。この優しさをみることで力がわくだろう。被災地にも水仙や桜の咲いた話題が紹介されていた。地元の人にとつてどれほど力を貰ったことだろう。大自らの時計は人がどんな目に合おうが休むことなく時を刻んでいるのだと実感しながら桜を見た。今迄になく花の美しさを悲しく見た私。人の力では止めたり、戻したり出来ない時間、大自然の営みに素直に合わせていきたいものだ。

花から若葉、新緑への季節になった。周囲が絵の具の筆で彩られていくように日々変っていった。故郷に生命力が溢れていた。新芽はその木の特徴を確りと表現していることを知ると美しさが見えてくる。

（あれから二ヶ月がたった。あの子達の周囲も生命力溢れた色に染められていることだろう）

片付やら無事や被害を確かめる連絡が済むと疲れがどつと出た。若葉を見て生気を与えて貰おうと庭先から田園に出た。そして霞ヶ浦周辺をまわ

って縄文人から力をもらった。広葉樹、落葉樹の森が答えてくれるようだった。玉造の里山や谷津田からも風の囁きを聞いた。八郷の山々では山を形どっている一本一本の木から表情を受け取った。余程風が吹かない限りじっとしている木達、柔らかな表情だが新芽が、若葉が自分の素顔を見せてくれている。

新緑の中に、クワンカン、クワンカンという鳴き声がある。ケーツ、ケーツと誰を呼んでいる。メツゴイ、メツゴイと何が鳴く。鳥の鳴き声に違いないと思いつつも気がなななな。ただ一人連絡のとれない友のことが気になっていたからだろうか。電話をかけても、

こちらは：

おかけになった電話は：

電源の届かない所に：

電源が入っていないため：

と音信不通の毎日を悶悶としていた時だったから緑のトンネルを通って藪の方へ行ってみた。柔らかな若葉は頬にも肌ざわりがよかった。茂みの中に雉子が一羽いた。一瞬鳥というよりも若武者が立っているように見えた。頭から体、尾の色の美しさは鎧を着、甲を被り、刀をさしている様で雄々しかった。じっと立っている。近寄りたいたい姿だった。今迄にも林にいる雉子、夕焼けの野原にいた雉子。道路を横切る雉子と見たが、比べものにならないものだった。一点を見たま振り向いてくれる様子もなかった。そこへ一羽の雌がやってきた。凜凜しい雄に比べて貧弱な雌、これ私みたいと思えた。その時には雄はいなかった。その後を追って雌もいってしまった。一瞬目を疑いながらも胸の中は空っぽ、でも母がよく口遊んで

いた歌を思い出した。が歌詞は覚えがない。

〃 焼野のきぎす 夜の鶴

親は子ゆえの・・・

メロデーはもの悲しく聞えた事を覚えている。あの雉子達も家族のもとに行つたのだから。友も家族の為に震災の後片付をしているのだから。今回強い思いを寄せた大切なものを確りと、守つていこう。大震災は沢山の家族を、友を、仲間の繋がりを壊してしまつた。どんなにか辛いだろう。悲しいことだろう。くやしいことだ。二度とこんなことが起きないように人が生きていく所は大自然の手の中にあることを忘れないでいきたい。自然の営みを大切にしなければ人の幸せの大部分である家族も大切に出来ないだろうと強く思う。

旅に行こう(2)

小林幸枝

先月号で、8月は長期の夏休みを取って旅行に行きたいと書いたのですが、ようやく行き先が固まつた。私を知っている人は、やっぱり、と言われるでしょうが、その場所は沖繩本島とその周辺の島々。

暑い夏になんでわざわざ沖繩なのかと言われるかもしれないけれど、暑い夏には思い切り暑い所に行く方がいいと思う。寒い冬には、凍りつく北海道や青森などが良いと思う。

夏の沖繩は耐えられないほど暑いのかと言えば決してそうではない。むしろ堪えられない程の不快感は暑さはないのだ。日中の日差しは焼けるような暑さを持っているけれど、からっとして

て気持ちがいい風を感じる事ができる。

島々では自然に逆らう事をしない生活があり、嘘のない暮らしがある。神話の世界がいまも日常の中に生きており、明るく一日を感謝する暮らしがある。

6月の公演では、神と対話する縄文人の舞を舞うけれど、沖繩には今も神と対話する陽気な踊りと唄がある。

灼熱の太陽に打たれて体の中にドロロンと溜まっているストレスを消し去り、リフレッシュして来ようと思う。

このふるさと風も、今月から6年目を迎えることとなった。文章を書くことなど私に続くわけなれど、気が付けば5年をクリアしていったのだ。本当にビックリです。少しでもいいから自分の思いや考えを書き続けることが大切なのですよ、と言われながら何とかやってきた自分をまずは褒めてあげたいと思う。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で・・・、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

Tel0299-55-4411

【今回、東日本大震災で報道された内の一部を纏め、数字で記録に残すという意味で、記載する。】

このたび、東日本大震災で被災された方々には、心からお見舞い申し上げます。

【地震の概要】

正式名称：「平成 23 年東北地方太平洋沖地震」。

発生日時：2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分。

震源：宮城県牡鹿半島東方 130 km、深さ 24 km。

マグニチュード (M)：9.0。

主要都市の震度：(震度 7) 宮城県栗原市。(震度 6) 仙台、宇都宮、日立、水戸、つくば。

(震度 5) 盛岡、秋田、福島、前橋、さいたま、千葉、東京、横浜、甲府。(震度 4) 釧路、帯広、函館、青森、山形、静岡、長野、新潟、名古屋。

主な余震：3 月 11 日 M7.7 (茨城県沖)、同 M7.5 (三陸沖)。4 月 7 日 M7.1 (宮城県沖)。

今回の巨大地震は、北海道・東北・関東地方などが乗っている北米プレートの下に、太平洋プレートが年 8 cm の速度で沈み込み、日本海溝付近で両プレートは固着して「歪み」が蓄積し (1140 年前の貞観 (じょうがん) 地震以来) 限界を超えて一気に解放されたもの。陸側プレートと海洋プレートの境界面は断層面となり、岩盤が大きく破断した海溝型地震である。そのため、震源域では陸側の海底が最大 5 ㍎隆起し、逆に震源域と陸地の間の海底は最大 2 ㍎沈下し、巨大津波が発生。名取市では内陸へ最大 6 km 以上も侵襲。今回余震は、三陸沖から茨城沖まで、幅 200 km、長さ 450 km の地域に群発したが、その他、余震とは言えないかもしれないが、富山県 (3 月 12 日震度 6 強)、静岡県、新潟県などでも大きな地震が連発した。

さて、M9 以上の地震は、世界でも 100 年間に数回しか発生はなく、今回の地震・津波は、歴史上最大級の規模と言える。マグニチュード 9.0 は観測史上世界第 4 番目である。[1 位は 1960 年のチリ沖地震 M9.5、2 位は 1964 年のアラスカ地震 M9.2、3 位は 2004 年のスマトラ島沖地震 M9.1]。今回の津波の高さ約 15 ㍎。

地震の規模 magnitude は、地震のエネルギーの大きさで、M7 は M6 の 10 倍、M5 の 100 倍、M4 の 1000 倍。M5~6 は世界で年 800 回、M3~4 は 5 万回、M8~9 は年 1 回程度発生。なお、世界最大の地震被害は 1556 年中国陝西省の推定 M8.5、死者約 83 万人、2 位は 2004 年スマトラ島沖地震 M9.1 の死者 226,566 人、津波の高さ 20 ㍎。2010 年ハイチ大地震では死者約 22 万人。日本では、1923 年関東大震災 M7.9、死者行方不明者計約 105,000 人で津波の高さは熱海で 12 ㍎。次いで 1896 年、明治三陸地震推定 M8.4、死者 21,959 人、津波の高さは 24.4 ㍎。更に 1995 年、阪神淡路大震災は M7.3、死者行方不明者 6,437 人であった。

しかし今回の大震災は、日本では 1000 年に 1 度とも言われ、平安前期 (860 年頃から四半世紀) は、864 年富士山噴火、867 年阿蘇山噴火、868 年播磨国で推定 M7 の大地震、869 年三陸沖で貞観地震推定 M8.4、871 年出羽国で鳥海山噴火、874 年薩摩国で開聞岳が噴火、878 年関東地方で大地震、880 年出雲国で大地震、881 年京都地方で大地震、887 年南海地震 (推定 M8.5) など、連発した巨大地震・噴火が、史書『日本三代実録』(漢文で 901 年完成・菅原道真等編集・全 50 巻) に、各国府からの報告として詳しく記載。江戸時代その写本が製作され、現在、国立公文書館に保存。日本列島は 1100 年前、連続で大地動乱が続いた

【およそ 1100 年前、平安前期に日本列島は、巨大地震・火山噴火が連動して発生した。東日本の貞観地震は、太平洋プレートが陸側プレートの下に沈み込む海溝型地震である。一方、西日本の東海地震・東南海地震・南海地震は、フィリピン海プレートの沈み込みに伴う、やはり海溝型地震で、富士山噴火はフィリピン海プレートの先端が、ユーラシアプレートに衝突する動きと強く結びついているといわれる。このように日本列島は時を同じくして巨大地震や火山噴火が連発し、大規模な地殻変動が起きていた。一方、1995 年の阪神・淡路大震災発生後、わずか 16 年で今回の東日本大震災が発生したわけで、1140 年というその間隔を、一つの「周期」と考えるならば、今後 10~20 年の間に、貞観時代 (18 年間に、10 数件の巨大地震・火山噴火が集中発生) さながらの列島連発大震災再来が危惧されている。とするならば、近い将来に西日本一帯を大地震・大津波が襲う可能性が十分有りうる…と学者の間で指摘されている。それを受け、菅総理の、今後 30 年以内に巨大な東海地震発生の確率 87% を理由に、中部電力の浜岡原発は廃止を要請され、中部電力は、それを受けることに決定した。産業界は大いに

異論が噴出しているが、なにかしら急に列島巨大地震連発の可能性が浮かび上がり、騒々しくなってきた。

参考までに、日経サイエンスの記事から、「日本三代実録」に記載のあった「貞観地震の津波被害」の項を抜粋掲載する。巨大地震は貞観 11 年 (869) 5 月 26 日夜発生し、地震津波の様子は詳細に述べられている。

(陸奥国、地大いに振動(ふる)りて、流光昼の如く隠映す。人民(たみ)叫呼(さけ)び、伏して起つあたわず、あるいは屋(いえ)倒れて圧死し、あるいは地裂けて埋もれ死にき。馬牛は驚き走りて、あるいは相舐り踏む。城郭倉庫、門櫓障壁の崩れ覆るもの、その数を知らず。海口(みなと)は咆吼(ほ)え、声雷(いかずち)に似、驚濤(なみ)湧き上がり、浜(そかい)・遡(さか)りして長く漲り、たちまち城下に至る。海を去ること数十百里。浩々としてその果てをわきまえず。原野(はら)も道路(みち)もすべて海となり、船に乗るいとまあらず。山に登るもおよびがたくして溺死者千ばかり。資産(たから)も苗稼(なえ)もほとんど残るもの無かりき。)と記されている。地震発生時、発光現象は、実際に起きることは知られている。城下は、国府の置かれた(現宮城県多賀城市)多賀城下のこと。

その他、864 年富士山噴火については、『甲斐国言いけらく、駿河国、富士の大山にたちまち暴火あり…』とか、867 年安蘇山噴火では、『太宰府言いけらく肥後国阿蘇郡、神の居せる山嶺、夜怪しき光照りて輝き…』。更に 878 年関東大地震では、相模国・武蔵国で(推定 M7.4) 大地震があり、莫大な被害、などと記載。】

今回の巨大地震が、千年周期の列島連発地震の前触れでなければよいが…と懸念されている。なお、政府地震調査会は今年 2 月、貞観地震の記録を踏まえ、東北地方に巨大地震発生の可能性について、警戒勧告文を成案・公表の直前に今回の巨大地震が起きたとされている。日本列島は地震多発国で、縄文時代以降 1 万年に千数百回の巨大地震の痕跡が残っている。(以上引用文献・日経サイエンス 2011 年 6 月号・他)。

さて今回の被害状況であるが、死者行方不明者数は 5 月 10 日現在 24,834 人。浸水家屋約 22 万棟で、約 8 割の 17 万棟が津波で流失した(全半壊家屋 115,930 棟)。家族を失った人々、職場を失った人々、就職内定を取り消された人々、そして本当に心が痛むのは、両親など失った震災孤児は 150 人にも及ぶという。

特に今回の津波は驚異的で、明治三陸地震の最高 38.2 ㍎を超え、40.5 ㍎までせり上がった。世界に誇る宮古市田老地区の防潮堤は、昭和三陸地震(1933 年、死者 3,064 人、津波高 28.7 ㍎)の翌年から 44 年かけて総延長 2,433 ㍎、高さ 10 ㍎(万里の長城と言われた)を築いたが、今回の津波はそれを 4 ㍎も超えた。この事から『巨大津波は構造物では防げない。高台に住む以外方法はない』と言われた。今回の津波は 10 時間後、8,000km 離れた米西海岸でも 2.5 ㍎に達し、大きな被害を与えた。更に、釜石市では、2 階建民宿の屋根の上に、市の観光遊覧船(はまゆり号 109 ト、4 億円で購入)が、ドッカーリ居座ったり、2 階のベランダにどこかの乗用車が流着。更には結婚式の 90% がキャンセル、他県に避難した福島ナンバーの車が、『福島に帰れ!』などと落書きされたり、避難民は、放射線がうつるから帰れ!…など、イジメにあったり、本当に心が痛む。

そして膨大な被害をもたらしたのは、東京電力の福島第 1 原発。1~4 号機が想定 5.7 ㍎をはるかに超える 15m の津波に襲われ、冷却ポンプの電源が破損し、水素爆発や放射能汚染水漏水で、放射能をまき散らし、住民の避難は 13 万人を超えた。特に外国人の退去・帰国現象は甚だしかった。放射能と震災による避難民は、合わせると全国 2,364 の施設に 20 万人に達しようとしている。特に、避難住民のうちの児童生徒の転校問題には心が痛む。当初、国際放射能事故評価レベル 5 から急遽 7 にレベルをあげ、世界最大と言われた旧ソ連の、チェルノブイリ原発事故(1986 年 4 月 26 日、4 機の内 1 機が制御不能に陥り、5,000 万キュリーの放射能をまき散らす。10 万人が退去。31 人死亡。3 機が復活したが 2000 年全面閉鎖。管理者 6 人が強制労働の実刑判決)と同レベルとなった。なお、チェルノブイリ原発事故の補償移転者達は、生存意欲を失い精神を患い、アルコール依存症や自殺者が多く出たという。またスリーマイル原発事故(1979 年)はレベル 5。

今回、被害額は農林水産業部門 1 兆 5054 億円、被害総額は 25 兆円とも言われる。地球温暖化防止のため原発は必要であるが、世界最大はアメリカで 104 機。総発電量に原発が占める割合は 20%。2 位はフランス 58 機(同 75%)。3 位が日本で、51 機(同 29%)である。中国、インド、ロシアは大量増設中であり、ドイツは縮小傾向。安全規制を強化すれば建設コスト高。太陽光・風力などは出力が弱く、悩みが多い。

特に今回、我々獣医師として心を痛めたのは、飼育する家畜の飼料が入らない。管理者が放射能汚染で、緊急避難。家畜は他に預けることも売却することもできず、かなりの頭数が餓死したことだ。拳の果てには、痩せ細っていく家畜を、法的裏付けもなしに処分とは本当に心が痛む。ペット動物に関しても、無慚で耳を塞ぎたくなるような情報が飛び交った。それにしても制限区域に立ち入れば罰金とは?…。

茨城県内の震災被害は、ほぼ県内全域ライフライン・通信・交通は途絶え大混乱。五浦の六角堂流失・鹿行大橋落下など目立った。家屋の全半壊・流失、塀や墓石の倒壊などのほか、港湾施設や水産加工場の破壊や船舶の流失。特に河川堤防の亀裂・沈下はひどく増水期が心配。県内の瓦礫など廃棄物は、45万トんに達し、平年の半年分に相当するという。更に土砂崩れ、地盤沈下、液状化現象。土壌は放射能汚染し、農地塩害や水田の給排水管破損などで田植えもできない。そして、放射能汚染した農畜産物・魚介類は出荷停止。更に風評被害は大きく、汚染してないものまで市場は受け付けてくれなかった。観光客も7割減った。開港して1年の茨城空港も被害を受け、発着便数は激減した。正に未曾有の超複合災害であった。

そうした中で、JR東日本は当日、地震発生時に動いていた新幹線列車本数は27本。しかし1両の脱線転覆もなく、サスガ…と言いたい。時速270km以上で飛んでいる列車は、地震発生時のP波をとらえ本震(S波)到達以前に電源を自動的に切り、急停車したのだという。正に世界に誇る最高のシステムである。

* * * * *

さて、長年にわたる日本の国際協力の恩返しというか、多くの国々から支援の手が差し伸べられた事は、真に感慨に堪えない。震災発生1か月で海外総義援金70億円に対し、その後カタル政府は、1億ドル(80億円)の支援を申し入れてきた。タイ国は日本が援助した火力発電機1機を3年間無償で日本に貸与するという。(それにしてもソフトバンク孫社長が1個人で100億円の義援金には恐れ入りました。)

特に米国は、同盟国として破格の援助をしてくれた。米軍最大18,000人による「トモダチ作戦」で、不明者の捜索・瓦礫撤去など、更に水7,700トン、食糧300トンを援助。艦艇15隻・航空機140機出動で渾身の努力をしてくれた。そして特に印象に残ったのは、米軍と言えば圧倒的な機械力を想像するが、映像によれば、遺体捜索など、全く手作業の泥まみれで頑張ってくれた。また、タイの一人1日1ドルで暮らす人々が、120万円もの義援金を贈ってくれたとの報道には涙が出る。

国内の支援も膨大なもので、自衛隊(10万人体制)・警察・消防関係者ら自らも被災者を含め、命がけの捜索活動・瓦礫撤去活動には真に感謝に堪えない。そして行政の職員は、自らも被災者でありながら、廊下でダンボールに寝泊まり。不眠不休で奉仕。それでも不満を爆発させる被災者もあり、真に複雑な感じを受けた。更に神戸・新潟などから先の震災のお礼の奉仕。そして全国から連休中など、一般人のボランティア活動には頭が下がる。更には岩手県の陸前高田市の景勝地「高田松原」はアカマツ・クロマツ7万本が見る影もなく流失し、瓦礫の山となったその中で、樹齢200年のアカマツ1本のみが奇跡的に、凜として生き残った。地元民はその姿に励まされ、復興のシンボルとして深く心に刻みつけられたという。一方、避難留守宅に空き巣が入ったり、資材不足をいいことに便乗値上げや、屋根瓦の破損した老夫婦の家に関西ナンバーの車が押し寄せ、ブルーシートをかぶせただけで、20万円もふんだくっていったという非道な話もあったが、総じて、今回の大震災では、国民の善意がみなぎっている感が強かった。

更に、この度の強烈な震災でも、現地で略奪や暴動が起きなかった日本人の崇高な倫理観は、世界から高く評価された。日本の衛生と治安の良さは世界一とも言われるが、こんな極限状態でもそれは守られていたことは、日本の誇りだ。国民総意で知恵を出し合い、1日も早い復興が待たれる。(2011年5月10日記)

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

- 6月 12日(日) 高橋竹童(Trinity) 津軽三味線コンサート
- 7月 24日(日) ディアンジェロ・シシリア & シシリア 真理子
- 7月 31日(日) A.R.C. タンゴ・コンサート
- 9月 4日(日) 大萩康司 ギター・リサイタル
- 9月 11日(日) 里山と風の音コンサート
- 9月 18日(日) チャン・ディンゴ ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

《ふうの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)ウララちゃん
皆さんをお迎えいたします。

電話 0299-46-310888

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第三章 因果応報の範囲(1)

旧約聖書によれば人類代表の模範生として「箱舟」に乗せられたノアは漂着したアララット山麓かどこかで収穫したブドウからワインを醸造し、それを浴びるほど飲んで泥酔していた。三人の息子から分かれた「セム」「ハム」「ヤフェト」が世界に散って主要民族になったそうであるから、それに含まれなかった出所不明の日本人は、アル中の子孫で無くて本当に良かった…

敬虔(けいけん)な日本民族は「酒」を神に捧げるものとして醸造したから「御神酒(おみき)」と呼んだのだが、ノアの子孫の民族は最初から自分で飲むために醸造した。ノアを弁護する訳ではないが、ブドウは放っておけば発酵してワインになりそうに簡単に酒造りが出来るらしい。そこで「酒呑み根性」を隠すために「ワインはキリストの血」などと言って誤魔化した。血の気の多いキリストでも他人に吸わせる程の血液はない。

イスラム教では飲酒を禁じているが、その理由は砂漠地帯でノアのような行動をとれば死に直結するからであろうと思う。厳格なシーア派イスラムの国イランでも近年までは自家醸造でオッサンたちはワインを飲んでた。指導者がホメイニ師になってからは禁酒が徹底され、本当に飲めなくなったらしい…でも、飲みたい…典型的セム語人種のサウジアラビア人などは、それを解決するために異国の土地を買って其処に歓楽都市を造り、

定期航空路まで開設して観光に行き大酒を飲んでいる。マホメッドも其処までは気付かなかった。

イスラエルには「先祖がすっぱい葡萄を食べると子孫の歯が浮く」と言う諺があるそうで、先祖が神に対して犯した罪は、後の子孫に禍を齎すと信じられているらしい。戒めではあるのが、神様から選ばれながらアル中になったノアの子孫は基本的に救われないことになるから「神の救い」などを主張している宗教も「人種に依っては効きません」と注記しなければ人を騙すことになる。

旧約聖書の世界を信じるユダヤ系民族は思い込みが激しいらしく、映画にもなった「出エジプト記」などの実際は、新聞記事にもならないような小さな出来事であったとする説が一般的である。エジプトは中王国時代の紀元前二千年頃に「ヒクソス」と呼ばれる異民族に支配された。これは中東に大飢饉があったため、豊かな国エジプトを目指して各地から出稼ぎに来ていた異国人が次第に勢力を増してエジプト人を凌いだものであり、徐々に平定されてきた中で居残った連中は、当然だが半分は奴隷のような立場に置かれていた。

それに嫌気がさした一部の者たちが新天地を求めてツアアを組み、噂に聞く「蜜と乳の流れるカナンの地」を目指したものである。モーゼは旅行者でもあったのか？ツアアの参加者は「出エジプト」に際して餞別こそ貰えなかったものの、食糧の持ち出し制限も無く、映画のようにエジプト人に追われる心配もなかったらしい。逆に長い歳月の砂漠の旅の辛さから「エジプトに残っていいれば良かった」と愚痴をこぼした者も居たようで、それを案内役のモーゼが何とか騙しながらシナイ山までやって来て新興宗教に誘ったのである。

この一行が辿ったコースは、見当違いの方角に向かったり往った道に戻ったり実に無駄が多い。目的地が「カナンの地」ならば、砂漠地帯に入らずに最初から地中海沿岸を真っ直ぐ行けば良い。

この集団は元来が遊牧民族なので一か所に留まらず遊牧生活に戻ったのか、或いは目的地の方向を見失って各地を回り歩いたのか、それとも酔いどれノアの子孫であるから真っ直ぐに歩くことが出来ずに遠回りをしたのか？何とも不可解である。

茨城県つくば市の研究団地では大勢の外国人研究者を受け入れているが、中には家族同伴者があり日本で生まれた子供もいる。其の子が故国のエジプトに里帰りをしてカイロの国際空港へ降り立った途端に「おうちへ帰ろうよ」と泣きだした人間の故国は何処でも住み慣れた場所が良いので宗教や主義で選ばれるべきではないし、冗談でも「蜂蜜や牛乳が川のように流れている」土地なども経っているユダヤ人が、少し嫌なことがあったからエジプトを出て故国のパレスチナに帰ろうと思いついたのはわがままであり、エジプト人なのに日本へ帰ろうと泣いた坊やに顔向けが出来ない。

モーゼたちが憧れたカナンの地とは農耕牧畜が始まった「肥沃な三日月地帯」の南方に当る地中海東岸、現在ではシリア、レバノン、パレスチナ、イスラエル、ヨルダンにかかる地域である。先史時代から人類が暮らした遺跡が各地に残る。沿岸部から数十キロの位置には死海が在り北方からヨルダン川が流れ込む。塩分濃度二十五%の死海には雑魚一匹居ないが、川の流域が農耕地になるから砂漠の民には涎(よだれ)が出るほど欲しい土地である。ただし地球上で一番低い場所なので寒

暖の差が大きく、リングとバナナが栽培できる。

砂漠に近い地域にある貴重な耕地が何時迄も空いている筈は無いので、ユダヤ人がエジプトへ渡ってから既に何百年も経過したカナンには他の民族が永住していて、怪しい集団が「只今、エジプトから戻って来ました！」などと言っても誰も相手にしてくれない。モーゼたちは四十年もかかって憧れの地に到達したようで、受け入れて貰える迄に四十年も要したということであろう。

そういう苦勞をして建国したイスラエル(ユダ)王国であったがダビデ、ソロモン、ヘロデなど、立派なのかどうか分からない指導者を生み、新バビロニア王国やローマ帝国に支配されては又しても国民が祖国に居られない状態が続く。古いころでは紀元前七二二年にイスラエル王国が滅び、紀元前五八七年にはユダ王国が滅亡し、一番新しいところでは西暦一三一年にローマ帝国の属州であったユダヤが反乱を起こして全ての国民は国土を追われたのである。これが遙かな御先祖である「ノアの酔っ払い」の所為であることは明らかなのだが、都合が悪いから他国の所為になっている。

その地域は「パレスチナ(ペリシテ人の土地)」と呼ばれる。其処には名称でも明らかかなように古くからアラブ系の民族が住んで居たから、空白の一八〇〇年間には土地の所有権も変わる。それを第二次世界大戦の後にイギリスやアメリカの後押しで「此処は俺達の土地だった！」と主張してユダヤ人が入り込み、勝手に軍事国家を建ててアラブ系の住民を追い出したのが「パレスチナ紛争の根」であるから、解決にも二千年はかかる？

日本で一八〇〇年前と言えば「魏志倭人伝」の頃であろうから国の実態も明らかでは無い。イス

ラエルの方では国家の形が分かっているだけ立派だが、それでも例えば或る日、我々の家に怪しげなオジさん、オバさんが訪ねて来て「私達の祖先が弥生時代に此処に住んでいたのだから直ちに立ち退いてくれ！」と要求されたら困る。中東では、それが国家として堂々と行われていたのであるから、やはりノアの子孫は酔っている…と思っただが、良く考えてみると、日本でも縄文時代に平和に暮らしていた人々のところに、突如として弥生人が侵入して来て縄文人を追い出した歴史があるから、ノアの子孫を悪くは言えない。

日本の国土は七十五%が山林だと言われるが、農耕に適した土地に恵まれており、武士の時代には「一所懸命」という言葉が出来たほど土地は命がけで大切にされてきた。第二の弥生人が出てきたり、中東のように一八〇〇年も前に迦(さかのぼ)って明け渡しを要求される心配は無かったけれども、農業が発達し家父長制度が行き渡ってくと土地の相続について身内の争いが目立つようになる。第二章で述べた「平将門の乱」やら清和源氏が世に出る切っ掛けとなった「前九年の役」「後三年の役」などは明らか豪族の家の相続争いが事件の発端になっている。

ところが常陸国から出て日本を支配し、その栄華の様が「平家物語」によって伝えられる「桓武平氏」の没落は、相続の争いに全く関係がない。清盛を柱とする一門の結束は固かったのである。これは平家の祖先が、熾烈な領土争い「承平・天慶の乱」を起こしたことを教訓にしていたからと推測され遙かな異国に伝えられた「すっぱい葡萄を食べると子孫の歯が浮く」という教訓が日本を守られたことになるのだが、平清盛らは逆に甘い

葡萄を食べ過ぎて歯が抜けたようなものである。

相続争いも無く結束も固く権力の頂点に君臨していた平家が、なぜ滅びたのか…と言えば、「平家物語・巻第一」の冒頭にあるように「驕れる者久しからず…」の因果関係によるのであるが、直接原因としては「反平家運動」に源頼朝が取り込まれたことに起因する。確かに日本国中を平家が独占したような状態に不平不満は潜在していたけれども、それは平家打倒に結びつくほどのものでは無かった。自家発電程度のエネルギーを東京電力並みにしたのは源頼朝である。しかし、頼朝自身はその様な意図も野心も持っては居なかった。

歴史について「虚構と眞實の谷間」を覗いてみようとするこの話の第二章では、平将門の乱を中心にして名声が必ずしも本人の功罪とは一致しないことを述べたつもりである。この章では華々しい活躍をした人物でも、自分の意思に関わらず所詮は目に見えない因果関係に引き摺られて右往左往した部分が歴史に認められることを示してみたいので、その為に平家を滅ぼした人物として源頼朝にスポットを当てるが、それ以外にも「平家没落」源氏興隆」の過程で、被害者の平清盛をはじめ歴史の舞台でチヨロチヨロした人物たちを掻き集めて出演させる。演技下手は御容赦を…

平氏一族が知らない間に平家の専横を憂慮し始めたのは後白河法皇である。保元の乱、平治の乱と平清盛が源氏を蹴落として勢力を伸ばすことが出来た背景には院政の強化を企む後白河法皇との深い結び付きがあった。しかし平家が天皇の外戚として権威を翳(かざ)すようになると、共に頂天を目指す両者の関係は冷えてくる―

かつてフランスでド・ゴール大統領が頑張って

いた頃に、孫の少年と会話していた大統領が何気なく聞いた。「：将来は何になりたいのか？」少年は祖父の期待に応えるべく、胸を張って答えた。

「僕も大統領になりたい！」これを聞いたド・ゴール氏は顔色を変え、憤然として叫んだ。「それはダメだ！大統領は一人でいいんだ！」

独裁的な政治を行う人物は自分が全てだと思ひ込む。後白河法皇も平清盛も、その部類の人物であるから何時までも仲良くは出来ない。法皇は平家の打倒を考えるようになる。其れに加えて平家は清盛の父祖の代から西国で海賊退治などに従事していた関係で宋（そう＝中国）との貿易により莫大な利益を上げていたからその妬みも受ける。

さらに、朝廷に巢食う公家や高級官僚たちが出世の枠を平家一族に奪われたことを怒り、また地方武士団の有力武将たちは領地の大半を平家一族が支配することへの不安と反発が勤番など課役への不平不満を募らせる。時代としては比叡山など有力寺院の僧兵たちが力を増して争いを繰り返す国家権力に従わなくなった頃でもある。

それやこれやで単純に言う「平氏一族の独占」に対する不満やら、その影響が密かに蓄積する中、反平家運動の芽は少しずつ各地に出始めていたのだが、実際行動として諸国武士団を「その気にさせた」のは以仁（もちひと）王が出した「挙兵勧誘」のお墨付きである。此の人は後に源頼朝や義経らを手玉に取った後白河法皇の第三皇子であるが子供の頃から比叡山延暦寺に放り込まれ坊さんにさせられていた。其の理由は、皇位継承をめぐる建春門院の嫉妬だと言われている。

建春門院というのは、平清盛の後妻・時子の妹・平滋子である。後白河法皇の後宮に入り憲仁（の

りひと）親王を生んだ。後白河法皇には多くの側室が居て男児も多かったから滋子が出しやばらなくても良かったのだが、清盛が権力を維持する為に不可欠の女性で立派に役目を果たした。第七皇子の憲仁親王は八歳で高倉天皇として即位する。その際に目ざわりだったのが、頭も良く、見掛けが上品でお習字が上手だった以仁少年である。平滋子に邪魔にされ、殺される代わりに皇位継承枠から外させる目的で比叡山送りにされていた。

それを叔母さんの八条院が気の毒に思っただけの子にしてくれたお蔭で坊さんにならなくて済んだのである。後見人が金持ちだと幸運が無い込むもので、親王にも皇太子にもなれなかった以仁王にもやがて「次の天皇」と言う話を持ち込まれた。高倉天皇の後継ぎが乳幼児だったからである。

ついでに触れて置くと八条院は鳥羽天皇の第三皇女である。母親が鳥羽天皇の寵愛を一身に集めた美福門院・藤原得子なので両親から膨大な皇室資産を貰い受け、また甥の二条天皇（以仁王の異母兄）准母として院号を許された。現代はお布施の額次第で（死後に）誰でもお寺から院号を貰えるが、本来の院号は天皇に次ぐ地位と、上皇に準ずる待遇を与えられるものらしいから、余程の美人でないと無理であった。男は論外である。

八条院が貰ったのは諸国に百か所以上と言われた莊園である。その莊園は皇室領として龜山上皇に伝えられ、それが南北朝時代に南朝方の資金になって合戦を長引かせた。そして天皇の器（うつつ）では無いと言われた雅仁親王（後白河天皇）を皇位に就けたのも八条院だと言われる。その為に崇徳上皇が怒り保元の乱が起こったようなもので、考えてみれば実に人騒がせな女性である。

その八条院の後押しで、高倉天皇に次いで皇位に就くつもりでいた以仁王の夢を、またしてもあっさりと砕いたのは平清盛である。先ず邪魔な後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し二歳になる自分の孫を安徳天皇として皇位に就けてしまった。これにより以仁王は単なる皇族の端くれに成り下がった。

憤懣やるかたない以仁王に「平家追討」を呼びかけたのは摂津源氏の源頼政である。深夜に王の住まいを訪れ、諸国の反平家武将たちに決起を促（うなが）す令旨を下すよう要請した。その年の数年前に都に居た武士たちの間で密かに「平家打倒」の謀議が行われたのだが、仲間の密告により潰れていた。これにより平家に不満を持つ武将の存在が察知出来たから後白河法皇の皇子で一次的だが天皇にも擬された以仁王の令旨（りようじ）を貰い、主として東国の武将たちに配ることを思いついたのである。ただ「令旨」は皇太子、皇后、皇太后、太皇太后しか出せない筈で、以仁王は天皇候補ではあったが落選したので、本来ならば令旨を出す資格が無いと思うのだが：

固いことは言わずに続けると、令旨発案者の源頼政は清和源氏の嫡流であるべき家系の人物なので、先祖が足柄山の金太郎＝坂田金時など四天王を率いて「大江山の酒呑童子（しゅてんどろうじ）」と言う大盗賊を退治し「今昔物語」にも勇名を馳せた「頼光（らいこう）さん、こと源頼光（みなもとのよりみつ）」である。しかし、この家系は、頼光さんのあと、光りも輝きもせず、父祖の地・摂津多田（兵庫県川西）に住み、宮廷に奉仕する武士として終わる人物が多かった。

それに代わって堂々と「清和源氏本流」を主張してきたのが頼光の末弟・頼信から頼義―八幡太

郎義家―為義（義家の孫であるが養子となる）―義朝―頼朝に続く家系である。源頼信も優れた武将であり、また地方の国司として登用された官僚でもある。石岡市史・上巻にも常陸介となったことが記録されている。これは平将門の孫に当たる平忠常が下総国で反乱を起こした際に、甲斐守として山梨へ赴任したばかりの頼信が急遽、常陸介兼上野介を命じられて石岡に来た―或いはそれ以前にも常陸介になって常陸国府に居たことがある―その頃の記録であろう。

その時の騒動では、最初に平忠常の征伐を命じられて苦心したのが平貞盛の次男・維将の孫で北条氏の祖となる中級官僚の平直方である。中央に居てエリートの道を進んできた警察官僚であるから在る日、突然に「常陸・下総で暴れている武士を退治して来い」と言われ戦闘訓練も出来ていないような兵士を少しばかり預けられても簡単にはいかない。遙々と関東まで来たけれども、相手が強すぎるから手も足も出ない。暫くの期間を鎮圧に手こずって過ごした。

甲斐国府で荷物を解く間も無く、命令の変更で以前に赴任したことがある常陸国府へ移らされた源頼信は、国府の役人から状況報告を受けると、筑波山麓に住み国府に勤務する大掾氏らの軍勢を従えて前線に行き、暴れ回る平忠常の軍勢に向かって「頼信が来たぞ！」と叫んだだけで見事に敵を降伏させ乱を片付けてしまった。平直方は頼信の武勇に感嘆して息子の頼義を娘婿にと望んだ。夫婦の間に生まれたのが、八幡太郎義家である。頼信は関東の武士団に頭領と仰がれ、それ以来、東国は源氏の拠点になったのである。後に清盛に命を助けられ伊豆に流されていた源頼朝が、平直

方から五代目であると主張する北条時政の娘（政子）に恋文を送り妻とする。そして北条氏の協力で凶らずも平家打倒の兵を挙げることになる。

一方、日本史の中枢に位置した「清和源氏頼信流」に対して、地味と言うかモグラのように陽の当たらない場所が嫌いだった？清和源氏本流の摂津（多田）源氏は、それでも幾つかの流派に分かれていて源頼政は先々代迄、本流の家系であった。院政を開始しながら「双六の賽（の目）」と鴨川の水（治水）と山法師（僧兵）は朕の心に従わぬ：」と嘆いたと言われる白河上皇の忠実な家臣として

仕え、保元の乱では白河上皇の曾孫になる後白河天皇側に従って生き残り、平治の乱では同族の源義朝（頼朝の父親）についていたが、待遇が悪かったのか負ける予感がしたのか、合戦の途中から平清盛に従って勝ち組に入った。

味方だと思っていた頼政が、いきなり敵軍として現れたので義朝は怒り「名前を源兵庫頭（当時）と言いながら、伊勢平氏ごときに騙されて手下になるとは何と言うことであろうか、そなたの裏切りにより源氏の武名に傷が付くことが悔しい：」と怒鳴ったが、頼政も負けずに言い返した。「武士は天皇に奉仕するのが本来の道なのに、貴方は藤原信頼という馬鹿公家に騙されてそちらに付いていることこそ源氏の恥ではありませんか：」

その関わりで唯一、源氏でも現役で居られたのだが平家全盛時代になると出世は難しく従三位になったのには苦勞もあるらしい。寝返りの実績があるから性格的に飽きっぽい人物だったかも知れないが、今回の場合も折角、手にした地位を捨てて簡単に「平家追討」を思いつく筈は無いので、ここにも一つの因果関係があり、源頼政は運命的

に平氏を倒すダイナマイトの遙か先端に付けられた粗末な導火線にならざるを得なかった。

まず数年前に発覚した平家打倒の謀議は「鹿ヶ谷（しがたに）事件」と呼ばれ後白河法皇の近臣たちが中心になって行われたものである。その際に仲間に加わっていた多田蔵人行綱と言う武士が急にビビリ出して裏切り、平清盛に一部始終を密告してきた。これにより首謀者の大納言・藤原成親、その子・成経、法勝寺（ほつしようじ）白河天皇御願の大師）執事の真言宗高僧・俊寛や後白河法皇の近臣である西光（藤原師光）はじめ一味に加担した武士たちが逮捕された。

源頼政はこの仲間であった訳では無いが、密告した多田行綱が摂津源氏頼光流の本筋に当る人物であるから、同族の怪しげな行動は平家方からも後白河法皇方からも不審の目で見られる懼（おそ）れがある。また、逮捕された西光の子で加賀国司の藤原師高が現地、白山の僧兵との間に起こした争いが原因で比叡山の僧兵たちが暴れ出し、その事件が頼政の首を絞めることになり、さらに現地のトラブルを後白河法皇が仲介して収めたことに対して平氏が師高を処罰し、今度は法王が清盛に近い高僧を罰する事件が起こり後白河法皇と平清盛との対立が深まる。両者に仕える形の源頼政は微妙な点でそれらに関与させられるのである。

神道を合わせた仏法の権威を楯にする僧兵たちの横車押しには法皇も手を焼いていた。平家は後白河法皇に対抗するため、宗教団体と手を結んでいたようであるが治承元年（一一七七）春には、比叡山の僧兵が近辺七社の神輿を担いで天皇の座所へ暴れ込もうとする事件が起こり、その力関係も怪しくなってくる。何しろ法王、平家、山門（僧

兵)の三者が権力を競うような庶民にとつては迷惑この上ない時代であった。神輿事件は、藤原師高と加賀白山との領地問題で山門が自分たちの主張を通すための要求である。神輿を持ち出すのは卑怯極まりないのだが、神仏が関わりと誰もが少し退く。現在でも地元(元)の神事となると不平を言えないようなものであろう。

その時に御所北方の門を警備させられていたのが源頼政であり、其処へ真つ先に僧兵が押し寄せてきた。その数は三千と言われる。守備隊は数十騎しか居ない。幾ら合戦を商売とする武士でも百倍の敵に勝てる訳が無いし万一、勝てば神仏の罰が当たると言われ、負ければ武士の恥辱になる。困った頼政は鎧兜に身を固め白馬に跨つて神輿の前まで行き、そこで下馬して兜を脱ぎ大地に臥して三拝した。それを見た頼政の郎従たちもそれぞれに神輿を拜んだ。勢いづいていた僧兵たちは、その様子を見て行進を止めた。頼政は側近の武士を集團の本部と思われる辺りへ行かせ、次のように申し入れをしたのである。

「此の門を護りますは源三位兵庫頭頼政です。此の度、神仏に対する武士の狼藉があつて、勿体なくも山王の神輿が御出座あらせられるとのことにて公家方が驚き騒ぎ、その旨が主上(天皇)のお耳に達し、門々を守護すべしとの御命令を受けました。源平両氏が武門の務めとしてその任に當つており、此の門は源頼政の担当となりました。

昔は源氏平家の優劣は無かつたのですが今は僅かに頼政のみが源氏として朝廷の御命令に従つており兵力も微々たるものです。源氏は年来、比叡山王の御加護を頂いておりますから、今さら神輿に対して弓を引く心算は有りませんが、もし合戦

ともなれば我々も防ぐほか有りません。どうかこの門を押し破つてお通り下さい。

しかしながら、僅かばかりの守備を抜いたとなれば山王の御威光にも傷がつくでしょう。それよりも此処から東南にある陽明門は小松内大臣平重盛公の軍勢三千余騎が厳重に守つておられます。その門からお入りになれば神威も高まり、皆様の御高名にもなるかと存じますが、如何なものでしょうか。どうしても此の門からと仰せであれば私は此処で屍を神輿の前に曝させて頂きます。」

それを聞いた僧兵たちは怒る者、感心する者、それぞれであつたが長老の間に頼政を文武に優れた武将と知る僧があつて衆をまとめ神仏に名を借りた暴徒たちは陽明門に移動して行つた。当然、平家軍との間に激しい合戦があり、僧兵に多くの犠牲者が出て、神輿もろとも撃退された。

源頼政は、合戦で全滅するところを上手く逃れた訳であるが昔も今も世論は無責任でうるさい。評論家と称するお節介の主導で、僧兵に対する頼政の対応が世間の評判になり「源頼政は知恵と弁舌で禍を免れた」と噂した。これが合戦を押し付けられた平家の耳に入れば只では済まない。僧兵の間でも「これは源頼政に騙されたか?」と思う者も居たであろう。僧兵は再度、集團を結成して都を襲撃しようと思論んではいたのだが:

御所に神輿などが押し寄せ、僧兵が平家軍に叩かれたのは四月十三日のことである。二週間ほど経つて京都は大火事になり御所まで焼けて多数の死者が出た。これは負けた山門(神仏連合軍)の報復のように思えるが、「源平盛衰記」では僧兵の撃退戦に暴れ過ぎて、遠方へ飛ばされることになった平家側の武士の送別会で、自棄酒が過ぎてま

た暴れた酔っ払いの一人が死んだ。それを隠すために家主が放火したのが原因としている。

これに対して「平家物語・内裏炎上の事」には山王(神仏)のお咎(とが)めで、比叡山から数千匹の猿が松明(たいまつ)を持って下りてきて都中を焼いた:と誰かの夢にお告げがあつたことを記している。噂を流したのは放火した犯人かも知れない。このほうが話としては受ける。しかし猿には気の毒なことで、冤罪(無実の罪)というのは猿の世界にも及ぶらしい。

どちらにしても平家に関わることで火事の原因は深く追及されなかつたようであるが、五月頃になると、僧兵が焼けた京都を占領するという噂が立つた。後白河法皇はこれに対処するよう近臣の藤原成親に軍勢の指揮を命じた。成親らは、その軍勢を使つて平家の打倒を画策し鹿ヶ谷で謀議を開いたのである。そうした中で、源頼政は自分の意思では無いが、何となく平家に睨まれるような出来事が多くて心が休まらない日々を送つていた。その一つに「名馬」のことがある。

頼政の嫡男は仲綱と言ひ、伊豆守に任官されていた。仲綱は自分の乗馬には良い馬をと心掛けていて、その頃に名馬を得た。それを知つたのが平宗盛である。清盛の三男ではあるが正室・平時子との間に生まれ、やがて平家の頭領となる人物であるから何でも我まゝが通ると思つてゐる。仲綱の名馬を見て「俺に貸せ」と言つた。仲綱は固く断つたのだが、頼政は平家の威光を恐れて息子に貸すように言つた。仲綱が断腸の思いで貸したところ宗盛は何時まで経つても返さない。それどころか名馬に「仲綱」と烙印を押して、来る客に見せびらかし「仲綱に乗る」「仲綱を引け」「仲綱を

鞭打て」などと言つて憚らなかつた。頼政父子は怒りを堪えているしかなかつた。

それより先、治承二年には平清盛の娘・徳子が安徳天皇となる言仁（ときひと）親王を生んだ。絶対権力への強力な切り札を手にした平清盛は、高倉天皇を動かして言仁親王を皇太子に据えた。当然、反対するであろう：後白河法皇は、鹿ヶ谷謀議の黒幕として鳥羽殿に幽閉されてしまった。

この時に、平家に近い人々が後継ぎの宗盛を訪ねて「亡き重盛殿が居られたら、清盛殿にこういうことはさせなかつたであろう：」と忠告したので、宗盛も仕方なく清盛を諫めて、法王を帰させた。幽閉中の法皇に従つていたのは源仲綱である。

こうした一連の出来事から、清盛初め平家一門の暴挙に対して憎しみが高じた源頼政は、平氏全盛時代とは言つても諸国には流派こそ違え、多くの源氏系武将が居ることを思い出した。今のところ自分には何の咎めも無かつたことを幸いとして密かに決意を固めたのである。先ず目についたのは僅か二歳の安徳天皇の即位によって前途の希望を断たれた以仁王である。平家に反感を持つ武士団を決起させる切り札として「平家追討」の令旨を以仁王から請い受けることにした。或いは頼政に対して後白河法皇からの示唆があつたかも知れないのだが：そのほうが自然である。

源頼政から切り出された突然の話に以仁王は驚き返事のしようもない状態であつた。芝居見物やデパート巡りのお誘いと違って、時の権力に対する謀反の勧誘である。取り敢えず、その夜はお引き取りを願つた。翌日になると源頼政は現職の少納言・藤原惟長を連れて来た。少納言は天皇の印鑑を管理し、詔勅などを下す専門の公家で従五位

相当の高官である。この公家は副業に占い師をやつていて、特に人相を見るのが当たると評判になつていた。以仁王に拝謁した惟長は、筋書どおりに一步飛び下がつて平伏し「：恐れながら天子の位にお就き遊ばす御相におわします。どうか天下萬民のことを御心からお捨てになりませぬように：」と言つた。傍らにいた頼政も、わざとらしく平伏し直してから「：誠に少納言殿は良く御相を觀られる：」などと感服したふりをする。

其処まで言われると消極的だつた以仁王も悪い気がしない。こうして諸国に雌伏（しふく）密かに時節待ち）している武士団に対して「平家追討」の令旨が発せられることになつた。以仁王は書を良くしたので自分で文を書いたが、無位無官の身であるから印鑑が無い。その紙に少納言が宮中から拾い出してきた適当な印鑑を押すと、立派な令旨が出来上がった。そこで頼政が息子の仲綱を呼んで令旨を配る者のリストを作成させた。書きあげたのは主に源氏の諸流であるが、名簿にしてみると結構、頼もしい顔ぶれになつた。

先ず地元の京都には、かつて勇名を馳せた「頼光さん」の子孫数名が残つて朝廷に仕えている。大阪近辺では鹿ヶ谷の陰謀で寝返つた撰津源氏の多田行綱が居るが、これは危なくて誘えないけれどもその一族で行綱を憎んでいる武士が数名いて、大和（奈良）、近江（滋賀）、熊野（和歌山）にも名のある武士が潜んでいる。美濃（岐阜）は国司の多くが頼光さんの子孫だつた関係で美濃源氏として一派を成していた。さらに甲斐（山梨）には新羅三郎義光（八幡太郎義家の弟）の子孫が国内に定着し甲斐源氏として隠然たる勢力を保持していた。隣国の木曾には義仲が居り、常陸国では奥

の方の甲斐源氏本流である佐竹氏が南部大豪族の大掾氏と縁組を結んでいるほか、霞が浦地区には信太義憲が居り、上野（群馬）と下野（栃木）には足利と新田が源氏の血筋を伝えている。何より伊豆（静岡）に流された頼朝は既に成人していて暇を持って余している筈であり、東北には弟の義経も隠れている。この中で発起人の頼政と仲綱は伊豆を知行地にしてきたから特に頼朝を重視したのだが、頼政父子は忘れていても頼朝の父親・義朝が平治の乱に敗れた原因の一つに頼政の寝返りがあつたから、此処は何とも微妙な関係になる。

それはそれとして、名簿に載つたのは源氏系武士であるが、他の氏族でも平家全盛の恩恵に浴さない地方の武士は賛成する筈である。「獲らぬ狸の皮算用」こうして平家追討の為の決起を促す「以仁王令旨」が配られることになつた。これを全員に配ると紙代・印刷代が高つくつので、基本的には「読んで聞かせる」か「見せるだけ」にして細部は使者が説明することにした。例外として伊豆の頼朝は発起人と微妙な関係であるし、今もつて平家の監視下に置かれた平治の乱の只一人の生き残りであり、源氏主流の人物でもあるので、特に令旨の原本を渡して熱心に勧誘することにした。

問題はその使者であるが、中途半端な人物が誘つたのでは信用されないから、然るべき地位にあり且つ源氏に所縁がある者で無ければならない。丁度、その頃に以仁王に仕えていた源氏がいた。と言うよりも、予め源頼政が呼び寄せておいたのが新宮十郎義盛である。この人は平治の乱に破れた頼朝の父親・左馬頭義朝の弟であるが合戦には参加していなかつたので熊野に隠れ住んでいた。全く身分が無かつたから以仁王が蔵人（側近）と

して任命したのである。名も行家と変えた。

行家は名前のとおり源氏系の家々に行き、以仁王の令旨を勿体ぶって見せ拳兵を促して回った。それが治承四年(一一八〇)初夏の頃であり、初秋の頃には、頼朝が伊豆で挙兵するのであるが、後で述べる理由で頼朝の決起は行家が渡した令旨に素直に従ったものでは無い。しかし他の源氏は令旨に拠って動いたので行家が「平氏政権打倒」に果たした役割は大きいのだが、どういう訳かこの人は歴史的に埋没して名前も知られていない。役目を果たしてから以仁王の許に戻って頼政らと合流し、あっさりと負けてからも平家軍と戦い、鎌倉を目指したけれども頼朝に拒否されて今度は源木曾義仲を頼った。そこでも仲違いして最後は源義経と組んだが、義仲も義経も頼朝に消された人物であるから、行家も無事では居られない。「運が悪い」と言えば簡単であるが、頼朝や義仲などの叔父であるから、その意識が先だち、加えて以仁王の令旨を持って来たという功名心が態度に表れて相手に嫌われたのであろう。「先祖の葡萄」だけでなく自分の播いた種も良かれ悪しかれ自分の運命に大きく作用するという教訓である。

もう一つ、この人物は重大任務を帯びながら大きな失敗をしている。以仁王の令旨を諸国の源氏に伝えるというのは極秘任務であるから身内にも他人にも覚られてはいけない。にも関わらず、行家は出発前に熊野へ寄り、僅かだが家来を呼び集めて任務の内容と行く先を自慢げに告げている。「：平家は是までの悪行が積もって今や逆臣となり宮(以仁王)の令旨に依って退治されることになった。私は関東の武士たちに決起を促す重要な任務を仰せつかったので暫く留守になる。その間

に合戦の準備を整えておくように」と命じた。その時に「これは秘密だ」と言ったのだが聞いた家来はその部分を忘れ、情報は瞬く間に熊野中に知れてしまった。「007」の任務内容が公開されたようなもので映画の場合だと観客は来ない。

熊野は僧兵が多く、全体としては源氏寄りではあるが平家に通じている者もいる。行家が留守の間に情報は平家側に伝えられて軍勢が押し寄せ、また僧兵同志の合戦も行われた。以仁王や源頼政らは慌てて軍備を整えたのだが兵力の桁が違い過ぎて宇治の平等院などで敗れ去った。事態を重く見た平清盛は安徳天皇などを京都から福原(神戸)に遷させた。これは源頼朝が伊豆で兵を挙げる二か月以上も前の出来事である。

重大な失敗を仕出かしたけれども、以仁王の令旨を持って新宮十郎行家がセールズに回った関東地方の武士たちは、殆どがその気になって地元で合戦の準備を始めた。但し、いずれも大きな勢力では無いから平家軍団に攻め込まれたら消えてなくなる。平家軍に対抗する為には一つの軍隊として纏まる必要があり必然的にトップに据えられる武将が選ばれなくてはならない。誰言うとも無く期待されたのが伊豆の蛭ヶ小島に流されていた源頼朝である。その為に本来は刑務所なのだが衣食の保障が無いことが幸いして自由に暮らしていた源頼朝は突如として争乱の渦中に巻き込まれることになる。頼朝には迷惑な出来事であった。

言うなれば個人的な都合で、真っ先に平家打倒の兵を挙げ、然も簡単に敗れた以仁王、源頼政らのことや、それに関わった後白河法皇が幽閉されたニュースはテレビ並みの早さで伊豆の頼朝にだけ伝わっていた。都の下級官僚で三善康信と言う

人物が知らせて来たのである。此の人の母親が頼朝の乳母の妹であった関係から、密かに頼朝に情報を流しており、筆まめな恋人同士の文通並みに頼朝は都の情勢が分かっていた。

三善康信は後に頼朝に招かれ鎌倉幕府の高級官僚として事務的手腕を發揮する。康信は頼政らの拳兵失敗により平家が頼朝を殺害することを決めた情報を掴んで、身の保全策を講じ東北方面にでも逃れるように進言をした。以仁王の令旨を受けようが拒否しようが平家は頼朝を生かしてはおかない。怪しい令旨を有難がっている他の連中とは立場が違うのである。康信は「早く逃げなさい」と言ってきた。その頃、頼朝は流刑者の域を脱して伊豆で穏やかな暮らしをしていた。逃げるのにも準備が要るし、行く先の選択もあり、何より頼朝は方向音痴で逃げるのが下手だった：

二十一年前の平治元年冬、源頼朝は父親の義朝や兄の義平らと共に平治の乱に出陣して負け戦となり、戦場から脱出する途中に馬上で居眠りをし一行とはぐれてしまったのである。尤も、それが幸いして命を長らえることが出来たのだが：当時は小学六年生か中学一年生である。平氏は西国が地盤であったが、源氏に所縁のある武士は東国にいた。京都での合戦に敗れた源氏が落ち行く先は東であるが、その為には東海道新幹線のコースで琵琶湖東岸を回り関ヶ原を通過しなければならぬ。関ヶ原は北の伊吹山塊と南の養老山塊(鈴鹿山脈)との切れ目にある小さな盆地で、近畿から東へ抜ける唯一の通路であるから、遠く「壬申の乱」から山際に関所が設けられ、地名の由来になっっている。西暦一六〇〇年に「関ヶ原の合戦」が行われたのも東西往來の要衝だったからである。

関ヶ原町史に依れば、其の関所は「不破（ふわ）の関」と呼ばれ万葉集に大伴家持が「関なくば帰りにだにもうち行きて妹が手枕まきて寝ましを」と詠んでいるように平時でも通行には厳しい検閲が行われていた。都での合戦に敗れた源氏の武將が通過できる訳が無いから、源義朝らは小関という険しい間道を越えて美濃国（岐阜）を進んだ。関所の直ぐ先の青墓宿には縁者がいた。遠回りした一行は青墓で一息つく間も無く尾張国（愛知）まで逃れ、頼った家臣の裏切りにより殺された。馬上で居眠りをしていた十三歳の頼朝は、折から降り積もった雪の寒さに眼覚めて山中に孤立したことを覚ったが、その場所が何処であるのかは分からない。「間道を抜けて行く先が美濃」とは聞いていたので山麓と思われる方向に馬を進めた。夜中に通過した集落では、落武者を捕らえようと待ち構えていた武装の団に囲まれながら父祖伝来の名刀で二人を斬り、敵が怯む間に雪の野原に駆け込んだ。そこで探しに戻って来た家臣に出会って安心したのも束の間、一段と激しくなった吹雪に馬も鎧兜も捨てて徒歩で山麓をさまよった。ところが、その途中でも一行から離れて道に迷い逆方向へ歩いて意識朦朧とした中に出会った尼僧或いは琵琶湖の漁師に保護された。都合合戦が行われたことは知れており、落ち伸びてくるのは負けた源氏に所縁の者に決まっている。頼朝にとって幸運だったことに、その一帯を仕切っていた下級役人が情け深い人物だったから発見者が連れてきた頼朝は二か月ほど近江の山里に匿われた。多分、峠を越えることが出来ず都に戻るような形で伊吹山の東北にある小部落に迷い込み、村人の手前は女の子として保護されていたようである。

その間に父の義朝らが尾張国で殺されたことを聞いたと思う。その状況を探り出そうとして或る日、密かに青墓宿を訪れた帰り道に関ヶ原で武士の団に遭遇した。源氏の武士が居る訳は無いから慌てて藪の中に隠れたのだが、見つかって捕らえられてしまった。未成年であつても合戦に出陣していたので、少年法の適用は無い。無条件で殺される予定であり本人も子供心に覚悟をした。

ところが、源頼朝は先祖を含めて大した功德も施していなかったのに神様から大きな仕事を与えられた。真面目だったノアを選んで失敗した西洋の神様の話が日本に伝わっていたのかどうか、平家と戦っていた仏教系の神様が事態を打開する目的で平家に追われる孤立無援の頼朝少年に賭けたのである。それは、争乱の発生に際して、本来ならば国家が鎮圧すべき任務を源氏と平家に任せて手を汚さなかつたツケを朝廷や公家に精算させることであり、また「戦さをする野蛮な階層」と見下していた武家出身の平氏が政治を左右している現状の改善を期待したものであった。

神様に見出された頼朝は、数十年かかったが、その期待に応えて平家一門を討ち滅ぼし源平時代という一つの歴史を完成させた。しかしノアが酒に酔って失敗したように、頼朝も自分の画いた夢に酔って神様の注文とは大きく違う仕事、余計な仕事をしてしまった。それまで藤原氏や平氏によって継続されていた「大陸王朝的な権威主義」の政治を根底から否定する「武力が支配する社会」を造り出してしまったのである。この人物の登場によって中世からの日本の歴史は鎌倉幕府、南北朝、室町幕府、戦国時代、織豊時代、江戸幕府から明治、大正、昭和時代と、

野獣のように「戦うこと」を第一義とするものになつていったのだと私見だが確信している。そうなるとは予想しなかつた神様は、平家打倒の為に必要以上のラッキーカードを頼朝少年に渡してしまった。ノアの教訓は日本では通用しなかつたようである。 ㊦㊧㊨

コーヒープレーク

唾液の効用

菅原茂美

人間の体は、言わば一本の管（た）のようなもの。基本的にナマコ（海鼠）と同じ、口から肛門まで、一本の管で、できている。兩横（十）管、トンネル等いすれも、スムーズに、内容物が通過しなければ、エライことになる。

さて人体でも、その管の中を食へた物が、消化吸収後、不要物を順調に排泄できれば、まさに健康。その潤滑油の作用をするのが唾液。その唾液が、心理的に好ましい雰囲気なら潤沢に分泌される。逆に緊張や憎しみなどネガティブな雰囲気なら、唾液腺の血管が収縮し、唾液は、スムーズに分泌されず、胃痛等不健康の元。

南米のアルパカ（ラクダ科）は、攻撃相手の目を狙って唾液を飛ばすが、人は和やかな談笑中は、唾液の分泌が促進される。人類は野生時代から、雄はフライバルや猛獣との戦いなど緊張の連続。現代も企業戦士等、心休まる暇がない。その点、雌は幼子に接し笑顔が絶えず、仲間との談笑も多い。男が女より長生きできない遠因の一つは、この辺にあるのかも…。

そこで名（迷）医の処方箋。動物は唾液タツプリ、傷口を舐めて治す。人も動物。唾液で傷心が治らぬはずがない。男女の唾液交換（フイー）キッスは傷心を癒す特効薬。活力の源。天祐神助のその相手…。それは、自分で探さない。

【特別寄稿】

振り返ってみれば

ギター文化館代表 木下明男

(ギター文化館の歩みを…)

ギター文化館は1983年に東京労音が招聘した、スペインの生んだコンサートフラメンコギターの巨匠マヌエル・カーノのコレクション18点を収めるため、クラシックギターの殿堂として1992年に開設されました。

マニエル・カーノは、生前十八世紀のバロック・ギターなど珍しいギターを収集しており、なかでも「私のレオナ」と名付けて愛用していたアントニオ・トーレスなどは、ギターファンにとつて一度は見てもたい貴重品です。そして亡くなる直前、「自分のコレクションを日本で生かし保存を…」と労音に夢を託しました。

「アントニオ・ド・トーレス」は十九世紀に活躍したスペインのギター製作者です。それまでヨーロッパ各地でさまざまな発達を遂げていたギターの良いところをまとめて、現代のギターの原型を作り上げました。

ギターを少人数相手の伴奏楽器の地位から、コンサート用の楽器に変身させました。今のギターの理想とされている、繊細で色彩鮮感豊かで、心を締め付けるような甘さを秘めた響きを確立させました。

ピアノの発達とともにチェンバロやリュート、ギターなどそれまで主流だった楽器が廃れゆくなか、スペインのギターの伝統が残ったことに、ト

ーレスギターの果たした役割は大きいといえます。ギター文化館では、このカーノコレクションの銘器の公開、ギターの歴史が解る展示と演奏ホール併設で内外の一流ギタリストによる銘器を使用したコンサートの実現。また、館内にギター工房を作り総合的なギターの殿堂にし、世界のギターの名所にしてきました。

M・カーノ没後20年の昨年は、地元やギター界からの応援もあり年間27回の主催コンサートを実現。今年も大震災のため4回のコンサート中止がありました。年間24回の主催コンサートを企画しました。

コンサート以外でも、ギターのコンクールやフラメンコの祭典、ギター製作コンクール等のイベントも含めて、茨城県や石岡市教育委員会、地元新聞、スペイン大使館、国際交流協会等の後援を力にして、ギターとその音楽の持つ高い価値を称揚し、それに対する社会一般の認識を高めるとともに、普及振興を図り日本や世界に向けて発信していきます。

地元茨城でも、つくば市や日立市、東海村など文化活動の盛んな地域と同様に音楽ファンやギターファンが集まる場となる事を目指して活動を進めています。特に地元石岡市の貴重な文化施設・観光資源として高く評価され、平成23年度観光事業功労者として、茨城県知事から表彰されることになりました。(2011.5.25)

(日々の自分を振り返って…)

早いものですな!

今日で5月も終わり、明日から6月です。数年前までは、もう初夏の陽気でこれから梅雨…。

それがもう既に入梅し、そして梅雨冷です。未だ上着が必要な毎日…。もう可笑しいと言うのは止めよう! 気候を毎年こうだから…と、経験則で判じる方が可笑しいのでは? たかだか僅かの人間の歴史、経験則で何が判るのだろうか? 自然に受け止め自然になすがまま、生きたいものだ。これを書き込んでいる最中にまた一揺れ…ビクツ…中々達観できないですね!

6月だというのに肌寒い朝だった。いつもはイヤホーンを両耳に入れ、ラジオを聴きながらの散歩だ。どう言う訳か昨夜から突然ラジオが鳴らなくなり、音なしで寝た。その延長で、音なしの散歩で自然の音を満喫する。

まず第一に耳に入ってきたのはけたたましいともいえる雲雀の鳴き声だ。よく言われているピーチクパーチクと表現されるに相応しい。その雲雀の音に混じって、鶯の声が…もう縄張りが確定したのか春先の覚束ないケキョケキョとかケキョでなくホー、ホケキョとしっかり鳴き切る美しい鳴き声だ。遠くからケーン、ケーン…雉の鳴き声が聞こえてくる。その他ツイー、ツイーと優しくヴァイツヴィツと強く聞えてきたり、ホークルルホークルルと掠れた低音で山鳩の声が…他にも沢山の鳥の声、風の音…自然の音が耳に入ってきた。

それでも、私にはラジオの音が…情報が欲しい。原発は、日本の経済は、政治は、野球やサッカー、ゴルフ等々のスポーツの結果は、芸能ニュース…俗人凡人の私でした。

【風の談笑室】

ふるさと風の会の前身である「ふるさとルネサンス」の講師を引き受けるときに、市民プロの育成という事であれば、の約束で引き受けたのであるが、肝心の母体が市民プロになれず沈没してしまった。

打田昇三さん、兼平ちえこさんのお二人が、そのふるさとルネサンスの第一期生である。女優の小林さんも一期生なのであるが、彼女は俳優塾としての一期生という事である。

市民プロ、とは名づけたのであるが、実際には市民プロなどという概念はない。しかし、ふるさとの復興と創造のためには、それを職業としないまでも、プロと同等に近い創造スキル(作文力)仮設定能力と実行力(行動力)をもった人材が必要不可欠である。

創造スキルとは()書きしたように作文力即ち仮設定能力のことである。これはどういうことかと言えば「既成を突き破る力」ということである。どのようなものにおいても、現状を新しく変えて発展・進歩させていくためには、現状に満足しない、現状を既成の事実にしなないという型破りが必要となる。

プロというのを定義するとすれば、既成を打ち破る力を有した人、ということが出来る。現状の既得権益にしがみついていたのでは、発展も進歩も創造することができないのは言うまでもないことである。現状を打ち破る力を有しているからこそプロなのである。

出る杭は打たれるが高く飛び出した杭は打たれないという。既成を打ち破る力とは、当に高く飛び出した杭ということである。

巻頭の文に「強かなる反抗」と書いたが、強かなる反抗というのは現状の僅かな既得権益にしがみ付かないという事である。現状の既得権益というのは言ってみれば残りカスのようなものなのだから。

価値の原理から考えたとき、価値の最大とは、既成を打ち破った発想を持った時点であり、その後その発想が現実のものとなるにしたがって価値は下がってきて、現実それが完成し利用されるようになった時には、価値はもう0なのである。

価値のことをマネー(お金)と考え認識する阿呆が居るが、間違いである。マネーは価値の中の一つの副産物に過ぎない。この事を知らないでマネーばかりを追いかけるところには発展はないと断言している。当然のことであるが、発展がないのだからマネーもないという事になる。

吾がふる里である「常世の国」と表現されたこの地は、新しい価値を創出する源泉となる歴史や文化の豊かなところである。その歴史や文化を基にして新たな価値を創出していくことに確りと目を向けてもらいたいものである。

6月17日、18日、19日の三日間、ギター文化館でふるさと風の会五周年展とことば座の第20回定期公演が行われる。

ふるさと風の会五周年展は、午前10時〜2時30分まで、入場無料。これまでの活動の足跡を紹介する展示物、会員の毎月の記事や、ふる里創作物語をまとめた小冊子の展示販売、兼平ちえこの風のことは絵と五百相展、そして風の会会員が講師を務める風の塾の「朗読教室」の生徒さんの発表会(平家物語)などが行われる。

ことば座の第20回公演は、常世の国の恋物語第27話として、神と対話を交わしていた縄文時代の霞ヶ浦をモチーフとした「流海の舞」を、美浦村在住のモダンダンスの柏木久美子さんをお招きして手話舞の小林幸枝との舞コラボレーションで朗読劇を演じます。音楽は、行方市在住のオカリナ奏者野口善広さんとキーボード&パーカッションの矢野恵子さん。舞台背景画は兼平ちえこさん。

この組み合わせでの表現発表は、今年二月に美浦村・陸平遺跡の文化財センターが初めて、今回は2回目の舞台である。

モダンダンスと手話を基軸とした舞のコラボレーションは、世界の演劇史上初めてのものである。詩文の朗読に既成の枠にはまらない二つの舞が心の模様を紡ぎ出していきます。

オカリナの野口さんは、毎回物語のイメージを汲んで製作したオカリナを用いての演奏を行ってくださっていますが、今回は劇中に登場する霞ヶ浦の紅い鯨をイメージして製作したオカリナで舞の音楽を演奏してくれます。

霞ヶ浦を中心に石岡市、美浦村、行方市の表現者たちの紡ぎ出す物語を是非鑑賞いただけたらと思います。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」(第27話)

ことば座第20回公演「流海(うみ)の舞」

6月17日・18日・19日(午後3時開演)

第20回公演は、常世の国の恋物語百/第27話として、モダンダンスの柏木久美子さんを招き、小林幸枝との舞の共演で「流海の舞」をお届けします。どうぞご期待ください。

私は静かに目を閉じ、
残像の鎖をゆつくりと巻き上げて行った。
穏やかな光の隙間から聞こえてくる
風の姿は、遙か遙か昔、
神が森の暗闇に隠れて暮らす人間達に
海に揺れて流れる光と波によって
紡がれる心の声の交わすことを
教えてくれた日の姿であった。

その時、神は天から降りてきて森の民達に
こう言った。
「民達よ。
心を容にするもの
それが言葉です。
民達よ。
言葉には容があり
そして姿があるので。
言葉の姿は舞。
舞は人の語る言葉の姿なのです」

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき
心もさらさらと流れた。
人はうるうるると心揺れる言葉を聞くと
心もうるうるると揺れて何かを予感する。
だから言葉は音楽(うた)であり舞なのです。
(第一景・恵みの詩より)

入場料 3000円(中学生 2000円 小学生1500円)

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ふるさと風の会5周年展 (6月17~19日: 入場無料)

ふるさと風の会は、常陸国の国府がおかれていた石岡市を基点に、霞ヶ浦を母なる「ふるさと海」としてその沿岸周囲に広がった豊かな大地に紡いできた暮らしの歴史・文化の再発見と創造を考えるなか、自己表現としての志を述べて行こうと集まった者達の会です。2006年6月より「ふるさと風」と題した会報を月一回発行してきましたが、今年5月号で満5年を迎え60号となりました。満5周年60号を記念して、ふるさと風の会歩み展と記念講演、及び風の塾(朗読教室)発表会をギター文化館にて開催いたします。

○5年間の歩み展

・会報第1号~第60号の展示 ・風の文庫展示販売 ・風の小窓(ことば絵)展示販売 ・兼平ちえこ風のことば絵展

○5周年記念講演

「言葉と表現(伝える)」(6月18日土曜日PM1:00~1:30) 講演 ふるさと風の会代表:脚本・演出家 白井啓治

○風の塾(朗読教室)発表会

・6月17~19日PM1:40~PM2:20 朗読:兼平良雄「平家物語 第十一巻 第百一句『屋島』」

※皆様のお越しをお待ちいたしております。